
食われた俺のゼロ魔戦記

ろんろま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

食われた俺のゼロ魔戦記

【Zコード】

N4663Y

【作者名】

ろんりま

【あらすじ】

聖剣世界に転生して、地道に生活していた俺はある日竜帝に（食事的意味で）食べられた。その竜帝も倒され、ああこれから滅ぶんだなと思っていたら目の前に光の帯が…これはいくつきやないだろう！

これは竜帝に食われた主人公が、竜帝を相棒として異世界でいろいろやっていくお話です。捏造、原作ブレイク、最強上等！（竜帝が）主人公は中ボスぐらいい。

プロローグ（前書き）

気づいたらやっていた。ドラまたのネタが思いつくまで気分的に更新予定。

これはアナログプロットがあるので更新早いかも。
ドラまたH…。

プロローグ

…ああ、終わってしまったのか。

デュランの奴が竜帝の喉を貫いたとき『中』でそう思った。

この聖剣世界にハーフエルフとして転生して早三十年。
一年前にこの竜帝に食べられて、ずっと止まっていた時がようやく
流れるみたいだ。

転生した最初は呆然としたなあ。なんせトラックに弾かれて気づいたらミラージュパレス。

普通こういうのって転生特典とかあるだろ? 何もないし、強いて言えばハーフエルフなだけだった。

まあ、折角なので原作ブレイクしてみたいじゃん?

つて感じで主教様に魔法を教えてもらったり、ロジュたちと平和に
過ごしてたけど、何も出来なくてさ。

悔しかつたな。

でも所詮現実なんてそんなもんだ。

原作通り世界大戦が起きて、壊れていく主教達を年齢よりもずっと
幼い体で悲しく見てた。

やがて反乱軍となつたロジヒたちと合流したけど、テケリよりもちつこい俺は何も出来ず、カオスオーシャンに消えていく家族を見ていた。

：最後にちやんとお別れできたのが救いだった。

その後、俺はベルガーさんに引き取られ、神官修行に明け暮れた。あ、ヒースとも仲良くなつたよ？

優しい聖都生活の中、すさんだ心は少しずつ癒された。

：リロイを救うことは出来なかつたがな。でも、数年寿命を延ばすことは出来た。

あの時は久々に泣いた。中身はとっくに成人してゐるに子供みたいにな。

それから色々あつて、修行を続けた俺は竜帝退治の回復役として無理矢理くつついていつた。

丁度この時期ロキさんが死んでしまつたのを思い出したからだ。

ベルガーさんはこの時不治の病にかかっていた少女を看ていたから、そのかわりにな。

結果的にロキさんは救えた。ただ、フェアリーは竜帝の隙を作るために…。

攻撃魔法をそんなに使えなかつた俺はこの田を機に攻撃魔法も学んだよ。

聖都に戻ると、ベルガーさんが泣いていた。

禁呪を使ってでも少女を助けようとしてしたけど、他でもない少女に断られたらしい。

彼女は人間のまま死ぬことを選び、一月後亡くなつた。

…後で思い出したんだがこれでベルガーさんの反乱フラグが消えたんだ。

俺は少女に出来る限りの感謝をしたよ。

養父の凶行を止めてくれてありがとうございました。

彼女は笑いながら逝つた。

当然、手厚く葬つた。

俺達は彼女の分まで人を救おうと決意新たにし、そこから11年経つた。

たまたまアルテナにきていた俺は、魔法練習している男女に出会つたんだ。

あまりにも必死な姿に、ついつい声をかけてそれがアンジェラ王女と後の紅蓮の魔導師だと知つた。

まあその時はそこまで思い出してなかつたが。

何とか魔法を使わせてあげたいな、と思つた俺は一人を連れてウンディーネを訪ねてみた。

俺のお願いにウンディーネは快く頷いてくれて、一人は何とか水を

出すことに成功。

紅蓮さんは魔力が少なかつたからちょびっとしかでなかつたが、アンジエラ王女は滝のように出た。

死ぬかと思つたぜ。

まあ魔法使えるようになつてよかつたな、と祝つて俺はアルテナを出る…筈だった。

紅蓮さんがクオン大陸へ行つてしまつたのだ。

あそこは倒したとはいえ竜帝の眠る場所。

アンジエラ王女に頼まれた俺はすぐさま連れ戻しにいき…既に復活していた竜帝に喰われた。

そこからの記憶は非常に曖昧だ。

なんとなーくナバールとローラントへ行つた覚えはあるんだが…何をしたかなんて覚えてない。

でも良いことをした気がするのは何でだ?

はつきり覚えてるのは仮面かぶつて各地のマナストーン解放してたぐらいかな。

多分ビコロが絶対洗脳されてたんだな、俺。

自我取り戻したのはどっからだけ…。

敵対組織をぶつ潰し、ドラゴンズホールで勇者たちと対面したとき

かな？

流石にかわいい妹シャルロットを見ればイヤでも起きる。
…システム言うな自覚してりあ。

その時の俺の台詞、こうだもん。

「来たな。マナの剣を寄越…シャルう！？」

「…？」

いやー、あれは面白かった。

敵味方関係なく驚いて俺見たからね。

まあそんな感じで洗脳解けた俺ですが、あつさり竜帝に連れ戻されちまつて。

役に立たん！と罵倒されて再び洗脳…それかけたけどじつくりお話しして、きちんと手を抜かず戦うと確約した。

それまで自由にしてると言われたのでウェンデルへ戻り、ベルガーさんとヒースにお別れを言いに行つた。

勝手に死んでごめん、さよならつて。

…今思つと竜帝の一欠片の情けだつたかもしけん。ちょこつとだけ感謝してやる。

で、ドラゴンズホールに戻った俺は約束通り本気で勇者たちと殺し合つて…負けた。

いやー、あいつらもつ相当の化け物だぜ。

だが、シャルロットには悪いことした。

俺はもうアンデッドだから、もつ聖都には帰れないって。

…大泣きされて打たれるわ蹴られるわ、ま、俺が悪いんだけどな?

男一人も辛そうだった。

おここら、野郎がそんな情けない顔するんじやない。

そう呟つて、シャルの頭をなでて俺は滅んだ。

そして今、俺は竜帝の中にいる。

真つ黒な空間で、竜帝が恨めしそうに俺を見ていた。

『貴様が奴らを殺していれば、こんなことは

いやいや無理だつて。

見ただる、あいつらのチカラ。

今おまえが滅んでいるのが何よりの証拠だ。

『…くつ、いつの時代も邪龍は滅ぼされるのみか

まあ、そういうことなんだつ。

でもお前はよくやつた方じやないか？ そりゃあ神様殺すなんて許せないが、出来ることでもない。

『貴様に言われても空しいだけだ……』

はいはい。

ほら、ひとつと滅ぶぞ。そんで次行くんだ次。

『次だと?』

転生って知ってるか?

実際に体験した俺が言つんだから、次に転生して一緒にバカやうう
ぜ。

『貴様、どこまでアホなのだ…我らはこのまま滅ぶ運命、女神にも
覆せぬ』

まあ普通はそうだろうな。

でも、何となくそうならない気がする。

『これは!?』

光の帯が俺たちの目の前を横切った。

とてつもないエネルギーだ。ひょっとしたら滅びかけた俺達を呼び
込めるかもしねないぐらいに。

「行こうぜ竜帝! あつちで新たに人生始めよ!」

『…いいだろ? ここまでくれば未練もない。貴様につきあつてや
る、ハーフエルフ!』

そこには名前で呼ぶところだらう! 一

何、忘れた？

しょ「うがない」。

「俺の名前はイオ！ ハーフエルフのイオだ！ しつかり覚えるよ
相棒！」

『誰が相棒だ！ 元配下の分際で！』

そう言って、俺達は光の帯の中に飛び込んだ。
だが、その後を追うかのようにハつの光が飛び込むのには、気づけ
なかつた。

光の帯を抜けた先に、女の子がいました。
俺達の目的である肉体再生がつまくいったと思つたら、これどいつ
う状況？

落ち着け、俺達の状況を確認しよう。

肉体の再生は出来てる、理屈は知らん。

俺は竜帝に食われた時の服装のままで、ゆつたりとした雪国の服だ。

対して竜帝。「こりは打つて変わって王様が着るよつた豪奢な服だ。
…つーか何故人間の姿になつてる？

まあ本来の姿はでかすぎるにも程があるから良いんだけど。

それにもつーつ。

何か俺異常に怯えられてませんか？

「ゼロのルイズがエルフを召喚した…」

「エルフだけじゃないぞ、ビージャの貴族と平民まで…」

ん？ 平民？

きょりつと辺りを見回して見ると、ぽかんとしている黒髪の少年が
いた。

どいつ状況か判つてないなこりや。そこは俺達も同じだが。

「コルベール先生！ 納得がいきません、儀式のやり直しを…」

俺たちを呼び出したっぽいピンク髪の美少女がちよつと禿気味の男性に言ひつ。

ふむ、儀式と言つていたし結構大事な事なのかね？

「すみません、状況の説明を求めます」

「そもそも貴様等塵も残さず消すぞ」

おこひらー

何物騒なこと言つてるんだよー

「は、何を言ひつ。我是竜帝ぞ、何故下等な者共を気遣わねばならん

… そういうえばおまえはそういう奴だつたな。

まあいざとなつたら俺が抑えればいいし。抑えられるかなんて聞くなよ！」

男性は少々冷や汗をかきながら、しかし油断なく言つた。

「判りました、説明しましょう」

曰く、これは使い魔召喚の儀式だそうで、ここにいる彼女の進級がかかっているらしい。

ここ学校だつたんだな。聖都にも似たようなのがあった、ここまで豪奢じやないけど。

話は戻すが、同時に複数の使い魔が召喚されたことなど未だかつてない上、俺がエルフというのが問題らしい。

契約してくれるのが否か。

契約の方法はキスらしい。

「俺は良いよ～。そもそもお嬢さんに呼ばれなきゃ死んでた身だし」

「… 我も特別に許可してやね!。そこな小僧はどいつかね?..」

「お、俺? … ハーん、その子が困つてゐなら別に良じけど」

少年、キスする」と前提に考えてるか?

… 多分考えてないだらうなー、何といつか能天氣っぽい。

しかし竜帝が許可を出したのは意外だ。使い魔なんて絶対にやらな
れやつ

「…… (じゅるつ)」

食つ氣だ。あの目は捕食者の目だ。

これはいかん、竜帝から絶対に目が離せなくなつた。

そんな俺の心配を知つてか知らずか、美少女はふるふると震えながら俺たちを見た。

「… か、感謝なんかしてないんだからねー へへへ、平民が貴族と
こんな」とできるのに寧ろ感謝しなさいよー。」

やつぱり、美少女は呪文を唱えつつ俺たちとキスする。
… えーと、何かごめん? でもちょっとびつどせじある。ビーセフ
アーストキスだよー!

ズキッ！

「あいたつ！」

右手が焼けるように熱い！

…だが、まあそれだけだ。実際に致命傷負つて死んだ身としては我慢できなくもない。

「ふむう…珍しいルーンですね。少しスケッチさせて下さい」

ああ、どうぞどうぞ。

あんまり興味ないんで。

少年は左手、竜帝は俺と同じく右手に刻まれたみたいだ。

…俺たちの言葉と少し似ているな。少年のはガンダーヴル？

俺たちは…しん、く、ろ。シンクロ？

まあ読み方があつてる保証なんてないが。

「ではこれで春の召喚の儀を終わります。ミス・ヴァリエールは彼らとじつくり話し合つて下さい」

「え！　コルベール先生！？」

「大丈夫、契約は済んだのだから。それに、エルフと言つても彼は無害だと思えます」

…」の世界のエルフは鬼か悪魔か？

「まあ、改めてよろしくお嬢さん、少年。俺はハーフエルフのイオ」流石に俺は自分より弱いもんをいぢめる趣味はない。

「我が名は竜帝。他を知りたければ対価を寄越せよ。」「まあ、改めてよろしくお嬢さん、少年。俺はハーフエルフのイオ」

「えっと、俺は平賀才人。あのさ、これ何のドッキリ? 早く家に帰りたいんだけど…」

ん?

「サイトよ、召喚の意味分かつてない?」

「うーんのーって呼び出されるかは本人の意思で、しかも一方通行だらう。」

「ええっやうなのか!?」

「呆れた…あんたちゃんとゲートを見て私の呼びかけに応えたの?」

「いやだつてさ、あんな面白うなの見たら…入りたくなると言つか」

まあ同意はするわ。

似たような理由でやつてきたから俺達。

しかしそうなると、サイトを元の世界へ戻してやる術が必要になるな。

服装からして、この世界の人間じゃないし。

ファ・ディールでもあんな服ないぞ。

「サイトのことは追々考えるとして…ルイズ嬢、ここではエルフは恐怖の対象なのか？」

「何言つてゐるよ！ 私たち人間から聖地を奪つたエルフは敵よ敵！ あんたもエルフなら……そういうばあんたハーフなの！？」

そんな驚いた目で見んでも。

何々、詰まるところ俺はルイズ嬢たちの宗教じや異端なんですか。ほお…。

「一度、その宗教の開祖にお話してやりたい気分だ…」

「ふん、女神の教えは全ての愛を平等にだつたか？ まあ元神官な貴様には許せん内容かもな」

そーだよ俺は元々クレリック！

詰まるところは聖職者。まあ他教にうだうだ言つつもりはないが、人間以外全て敵つてどんなんだよ。

人も亜人も仲良くなれるつつの…

これで聖職者にマトモなのがいなきや弾圧しにいくかもしれない…。まともな奴いますように！

「元神官…もしかしてイオつてす」いのか？」

「ん？ 回復魔法なら得意分野だよ。たとえ瀕死の重傷になつたとも一瞬で回復してやるぜ？」

「ぐり、と一人が息を飲むのが判つた。
この世界の魔法じゃ無理なのかね？」

「回復に関しては貴様とその妹が規格外すぎるだけだ」
なんだあの超回復、どれだけ魔法撃とつと死なないなんてどんなホ
ラーだ、と竜帝はつぶやいた。
「気持ちは分かる、次でトドメと思つたら傷一つなかつたなんてザ
ラだからな。」

しかしシャルロットが竜帝のトラウマになつてゐるとは思わんかった。

「あ、そうだ。

一応使い魔の仕事言つとくわよ？

ひとつは感覚の共有。でもこれ何も起きてないわね？」

感覚とこうと視覚や聴覚とか？ ゼンゼン共有されてないな。

「一つ目は宝石や薬草の収集。でもこれもあんまり期待しないわ。
二つ目、主人を護ること。あんたたちつて戦えるの？」

「我をなんだと思っている、竜を統べる帝だ。世界を滅ぼせる程度
の力は持つている」

俺除く全員が盛大に吹き出した。
比喩なくそれだから困る。

「えつと俺は…喧嘩ぐらにならひけると思つ」

「ラスボス以外なら大体イケる

特に広範囲殲滅戦が得意だよ！とは口に出さない。まあその気になればこの学校壊すぐらいのチカラあるし…。

あ、ルイズ嬢呆れてる。

「はいはい、あんまり期待しないわよ。

あ、そうだ。流石に人間が、それも三人も召喚されると思わなかつたから、寝床の準備がなくて。

その、外で寝てもらえないかしら？」

ん、野宿か。うん、俺はかまわんよ。

…何さ竜帝。その不満そうな顔。

「いやにあつさり頷いたわね」

「でもさ、テントとかはどうするんだ？」

良い質問だサイト。

だが問題はない！ 僕には倉庫があるからな！

ファ・ディールいちの便利魔法『倉庫』から、テント用具を引っ張り出す。

中身が無事で何よりである。

ルイズ嬢があり得ないものでも見ている目を向けてきた。いつとくが旅人なら使って当然なんだからなー？

こうして、俺と竜帝の異世界一日目は終わった。

…ただ、流石にテントに男三人は失敗だったと記しておぐ。おえ。

第一話。

規格外なのは当然です、一応は黒曜の騎士の代わりなので。
近接戦闘も割といけます。

墮ちた聖者の戦い方に近いかも。召喚は出来ませんがね。代わりに
狂ったようにエインシャントを使うのがイオです。
使用魔法は割と手広いんですが出番あるのかなー。
しかしこの小説、空気が多くそうである。

異世界へ日田（前書き）

予定では決闘編まで行くつもりだったのに…あれ?

「うわあ…ひどい目にあつた」

テントの外にでると、まだ夜が明けた頃じゃないか。
神官の時の癖でそんな時間に起きてしまつた。

サイトと竜帝はまだ寝てる。

しつかし…夢じゃなかつたんだなあ。

そうだ、軽くお祈りして散策しよう。

学校内はともかく、近くの森ぐらいならいいだらう。
では女神様、今日も一日が良い日でありますよ!ついに…
この世界には女神様いないだらうけどね。

散策終了!と!

ん? 森の生態系とか植物とか調べてただけだぞ。
似てるようで似てないのが多かつた。: 魔法の植木鉢作つて育成で
もするか?

種も倉庫に放り込んだいたし。

そんなことを悩んでたらいつの間にか陽が高いな。
さすがに起こしそう。

「おーい、朝だぞ~」

「あと五分……」

「……」

……お前ら起きる気ないだろ。竜帝なんか防音結界張つてゐるし。ちなみに竜帝は浮いて寝てる。雑魚寝が嫌だつたらしい。相当シユールだ……テントがそれなりの大きさじやなけりや どうやる気だつたんだ?

まあ起こすけど。

「アンティマジック」

べちつ！ 魔法効果が解けて竜帝が落ちた。頭から落ちた氣がするが大丈夫だろ。

「サイト」

「……ふひひ」

うわあ、こらつとく。

優しく起こそうと思つたけどやめた。

「必殺！ はりせんちよおつぶー！」

「ぶふおーー？」

ズパーーン！ と良い音が鳴つた。

うん、あの時シャルにやられたんだがよく効くな！

「貴様…元配下の分際で…」

あ。

*

楽しいお勉強の時間だー。

え、やけに棒読み？ あの後どうしたって？ 聞かないで下さい。

強いて言つなら朝ご飯食い損ねたな。

で、現在ルイズ嬢の授業に同席中。全員そろつてな。

「おや、ずいぶん珍しい召喚をしましたね、ミス・ヴァリエール」

俺達割り込みましたから。

するとふとつちょの少年が立ち上がった。

「どうせその辺の平民を連れてきたんだろー。」一寧に飾り耳まで
つけて…」

「何ですってー!?」

飾り耳じゃねえぞーと、言いたいところだが黙つといった方が良いな。
ふとつちょよ、是非とも広めてくれ！

「大体サモン・サーヴァントで二人も呼び出すのが可笑しいんだよ、
ゼロのルイズ！」

「ミス・シュウルーズ！ 毎晩されましたわ、風邪つぴきのマリコルヌだ！」

ルヌに！」

「か、風邪つぴき…僕は風上のマリコルヌだ！」

「これは…一いつ名かななかか？」

しかし風上と言つことは風の魔法が得意なのか。でもルイズのゼロ
つてなんだ？

あ、先生が粘土を飛ばして黙らせた。

うううん、先生は怒らせちゃいかんよな。

昔、魔法の師匠だつたベルガーさんを怒らせたときなんか…やめよ
う。ダークリツチの幻影が見える。

つと、ちょっと意識飛んでたな。

危うく魔法講義を聞き逃すところだつた。ランク分け理解！

しかし面倒な魔法だ。杖がなきや使えないなんてな。

「なあなあ、ルイズの系統つて何なんだ？」

「わ、私は…その…何でも良いじゃない！」

おーい、五月蠅いと先生に叱られるぞつて遅かつた。
眼鏡が光つてゐる。

「ではミス・ヴァリエールに鍊金を実践してもいいまじょう

ビクッとクラスが凍りついた。

「何だ？ 怪えてるぞ。

青い顔をした赤毛の美女が立ち上がった。

「先生、やめてください！ ルイズは！」

「何です、ミス・ツェルブストー。よもや貴女まで彼女を侮辱するわけではありませんね？」

「違います！ ルイズの魔法は危険なんですよ！」

「？」

妙だな。クラスの様子からしてもただ事じゃない。だが、観察しているうちにルイズ嬢は行ってしまった。

「竜帝」

「面倒だが……心得た」

生徒はみんな机に隠れてしまったので、俺達だけ防御魔法を展開する。

ちゅぼおん！

「げつ！」

思わず声にでてしまった！

ルイズの魔法はとんでもないな！ 竜帝の防壁を搖るがすと。

「ちゅうと、失敗してしまったみたいね」

無事なよう何よりだけど、煤けてるよ。

結果、ルイズ嬢はぼろぼろになってしまった教室の片づけを諒じられた。

俺達も手伝いを申し出たが……氣まずい。

ルイズ嬢は泣いていた。

「……魔法成功率0。だからゼロのルイズ……笑っちゃうでしょ。

学院では、いいえメイジなら使って当然のモンスターを失敗しちゃうんだもの、お似合いよね」

そう言つて、自嘲したように笑う。

既視感におそれる。俺はかつて、似たような人に出会つた。

『魔法を使えるようになつて、みんなに認めてもういたいのー。』

「アンジュラ王女…」

咳きが風に消えた。

目の前の少女は、同じ苦しみを背負つてゐる。

サイトが言つた。

「似合つてねえよ。そんなの、全然似合わない！」
「サイト？」

「爆発するからなんだよ、それだつて立派な魔法だろー。他の誰にもできない、ルイズだけの魔法だ！」

「そう、その通りだ。…ルイズ嬢、聞いてくれる？」

「…何？」

「魔法が使えなかつたお姫様のお話」

ルイズ嬢が目を見開いた。

それを肯定と受け取つて昔話のよつに話し始める。

「とある魔法王国に、一人のお姫様がいました。
お姫様のお母様は、魔法王国最高の魔法使いでしたが、お姫様は
魔法を使えませんでした」

すつと竜帝が目を向けてくる。かまわず続けた。

「お姫様は魔法王国の姫、魔法が使えないことはなりませんでした。
ですがどんなに頑張つても魔法が使えることはありませんでした」

「そのお姫様は、どうなつたの？」

震える声でルイズ嬢は言った。

「見かねた神官が、精靈を頼りチカラの振り方を教えてくれました。

その結果、お姫様は魔法が使えるようになったのです

「精靈…？ そのお姫様が使ったのは系統魔法じゃないの？」

いやこれ違う世界の話だしね、とは言わない。

「彼女は、生まれ持つ魔力が大きすぎたんだ。人の身では扱えないほど！」

だから神官は強い力を持つ精靈に頼んで、チカラの振り方を教えてあげたんだ

ルイズ嬢も同じじゃないかな、と竜帝に目を向ける。

「そうだな。小娘は我が見ても目を見張る魔力、…こちらでは精神力だつたか、を持っている。

思わず食らいたいぐらいのな

一瞬、朧気なドラゴンの姿が見えた気がした。

何度も見た、竜帝の本性。

「…嘘、私がそんなチカラ、持つてるわけ」

「疑うなら疑え。安心しろ、貴様は魔法が使える。チカラの振り方さえ覚えれば、特別飛び切りのな

特別飛び切り？

「最後まで教える義理はない、後は自分で考えろ。それより腹が空いた」

「… そうだな、早く片づけて飯行こうぜルイズ！」

「…もう少しき安く名前で呼ばないでよー。使い魔のくせにー。」

どうやら調子を取り戻せたみたいだ。よかつたよかつた。
ところで竜帝、さつきの言葉つて… もしかして？

「何も言つな

「……ん、そうだな」

まだ誰も気づいてないだろ？
ならばその方が良い。

異世界2日目（後書き）

魔法紹介！

アンティマジック：

敵一体の全魔法効果解除、初期化。

ここでは解呪の基本魔法として扱う予定。割とよく使う。

はりせんちょっぷ：

聖剣伝説3主人公の一人シャルロットのクラス3プリーストの必殺技。

例の戦いでやられる以前から持っていたハリセンを使用。何故持つてたかは謎。

別れの戦いの時には容赦なくシャルロットに使われた。

余談だがそのカウンターでエインシャント浴びせたが倍返しが来た模様。要するに袋叩きである。

一応ただのハリセン。

決闘?いやござひめだらけ (前書き)

決闘編。

正直にはあまり覚えてなかつたり。

タイトルは、お察し下さい。

決闘？いやこじめだひれ

決闘だ！

金髪の少年が高らかに声を上げた。ただしそれはサイトの方。

俺はとこうと、同じく金髪なんだナゾビンが陰険そうな少年に睨みつけられていた。

身に覚えが無さすぎるんですが！

少年が言った。

「ここは、貴族専用の食堂だ。そしてそこは僕の席でもある……意味分かるな、平民？」

俺が座っているここは竜帝が座っている席の隣である。厨房行くぞって言つても聞かなかつたんだよ…。

面倒事の予感。

「その付け耳といへ、そつちの偉そうな態度といへ、躾がなつてないようだな。

たすがあのゼロの使い魔だ、品がない！」

「…食事中に騒ぐことの方がマナー違反、品がないと黙つただが

それにルイズ嬢は関係ないだろ！」
あ、本音がぽろつと。

「貴様、貴族を侮辱するか！」

「侮辱も何も貴様の方が品がないだらう」

そう言つて優雅に食事を続ける竜帝。
おい、火に油注ぐな。

あーあ、陰険少年の顔が真っ赤だ。

「決闘だ！ 平民は平民らしくすることを教えてやるー。」

「だが断る。食事の邪魔だ、失せろ」

同感だがもうちょいオブラーート【包みよ】竜帝。

すると、陰険少年は悪戯を思ついたかのよつて一ヤつと口角を上げた。

「そつか、怖いんだな？ そんな風に貴族の真似事をしそうとも所詮は平民。

僕達貴族に比べれば下等な存在だ」

ピクリと竜帝の指がふるえた。

やばい、本気で怒つてゐかもしね。そつたつたら世界終わるだ。

…はあ。

「陰険少年。相棒の悪口はそこまでこじつてもいいわ！」

「陰険少年……だと？」

「性根の腐つてゐる悪ガキには陰険少年でも上等な呼び名だ、有り難く思おうか。

それにルイズ嬢も馬鹿にされたのじゃ黙つてられなくてね、決闘は俺が受ける」

思い切り貶すようだが少年のためだ！

さすがに聖職者としては自殺志願者を見捨てるわけには行かないし。

少年は乗るかな？

「いいだらう、その付け耳切り落としてやるー。」

「うむ、物騒な。

つて竜帝笑つてやがる…ハメられた！

そんな訳で何とかの広場。

どつせなう2対2でとこいつとこなつたんだけビ…「うーん。

「サイトかばつのせ面倒くさいから…『仮障男くん丸投げして良い』？」

「ちよー。」

だつてサイトの売つた喧嘩だらう。

俺、基本は護身術しか使えないんだよ。

フレイルあればまとめて相手できるけど、使うのハリセンだし。

「」の方が屈辱的だからな！」

「そんな紙切れで僕たちを相手するのか？」

呆れた顔を向けてくる陰険少年もとく「ヴィリエ。

いやいやこれで十分すぎるぐらいだし。

「サイト、イオ、やめなさい！ 今なら一人とも許してくれるわー！」

「」めん、ルイズ。でも下げたくない頭は下げたくないんだ！「

「似たような感じ。大丈夫、負けないよ」

「 つ！ 怪我するんじゃないわよー！」

それだとサイト無理じゃね？

氣障男くん ギーシュが杖を掲げる。

「では、始めよー！ 僕は青銅のギーシュ、土のダッシュメイジだー！」

「風の名家ド・ロレーヌのラインメイジ、ヴィリエだー！」

「俺は平賀才人！ おまえらのいう平民だー！」

「名乗るのかこれ？ ただのイオだ」

「行くぞー！」

ギーシュの一聲で戦いが始まった。

ギーシュは人形を生み出し、ヴィリエは風を放つ。

順番バラバラか。おい、連携プレーしろよ。

放された風を軽くかわすと、周囲が息を飲んだのが判つた。

「それが本氣か？」

「つ、なめるな！」

杖に収束する風が増えたが… まだまだそよ風だな。軽くかわせる。それよりサイトの方は、早くもやばいか？ 人形に翻弄されてる。怪我するなって言われてるし、さっさと終わらせますか。

「！」の、なんで当たらないんだ！

「答えは単純、陰険少年のレベルが足りないだけだ！」

ズパパン！

手に持つハリセンが、ヴィリエの頭と手をとらえた！

単純なダメージよりも、耳元で鳴つた強烈な音に、ヴィリエは杖を落とした。

ヴィリエの杖を拾つてにっこり笑う。

「お前の負けだ」

「…！ 嘘だ、この僕が平民なんかに！」

ヴィリエが吠えているが無視。

「サイト、手云うだ

「手を出さないでくれ！」

はい？

いやいや、そんなぼうぼうな体で何言つてゐのを、やられるだ？

「判つてゐ……でも、これは俺の喧嘩なんだ。俺がけりを付けなきゃ意味がないんだ！」

それに、俺はこいつにルイズをバカにされたのが何より許せねえ

「！」

「……」

……はあ。

「ここまで言われちゃ手を出す気も起きんよ。

「判つたよ、手当はしてやるから碎けてこい

そう言つと、サイトはこいつを笑つて再び人形に突つ込んだ。

そして数分後、見事にボコボコにされたサイトが出来上がった。

……流石にもつ限界だな。

「サイト、もういいでしょ！ ギーシュ、やめてちょうだい！」

「ま…だだ、まだ俺はやれる…！」

「…本当に忠実な使い魔を持ったね、ルイズ。
僕としても動けない相手をいじめる趣味はないし、いこよ、やめ
にじよ！」

「まだだつ！－！」

力強い叫びが、広場に響き渡つた。
誰も彼もが動きを止める。

サイト、お前…。

ギーシュは一瞬目を伏せて杖を振るつた。

花びらが一振りの剣となつてサイトの前に突き刺さる。

「まだやる気なら、取りたまえ。これは君への贈り物だ」

「とつちやだめ！ それを握つたら、今度こそギーシュは手加減しないわ！」

ルイズ嬢、止めても無駄だわよ。

ほら、サイトは荒い息を繰り返しながらも…剣をとつた。

ぼう。

ん？ サイトの左手が光つたよつな…。

「…なんだか判らないけど、力が沸いてきた。いける…」

「…?」「

そんな！

あんなに弱ってたのに剣を構えた！？

剣を握ったサイトは、別人のようなスピードで人形を叩き壊し、ギーシュに剣を突きつけた。

ギーシュ、ヴィリエの負けが宣言される中、違和感が拭えない。何なんだ？

「サイト！」

つと、思考にふけってる間にサイトが倒れた！

無茶しそぎだ全く！

鞄からはちみつドリンクを取り出す。高価な回復薬だが仕方ない！

「ルイズ嬢、薬だ！ これを飲ませてやつてくれ！」

「え、ええ！」

見る見るうちにサイトの傷が癒えていく。
ふう、これで一安心か。

「す、すつじい回復力…これとんでもなく高価な薬なんじや…」

「高いは高いが人命優先、気にするな」

ホントはヒールライトのほうが緊急には向いてるんだけどな。

でも大っぴらに魔法使つたら目立つし、仕方ない。

…でも何か別の意味で目立つた気がするのは何でだろう?

決闘？いや、はじめだけ！（後書き）

はちみつドリンク：

聖剣伝説3最高の回復薬。単体で999回復する。

ヒールライト：

回復魔法。効果は使用者の精神によって変動する。イオはシャルロットと同じぐらい効果がある。

ハリセンで戦う元中ボス。
完全に遊んでます。

因みに竜帝は怒ったわけではなく、イオに発破をかけただけです。

盜賊騒ぎ（前書き）

追い回した生徒は主にモンモンとタバサ。

決闘から五日経つた。

あの後あの秘薬はどこで手に入れたのか聞かれたけど、作ったと言つといった。

異世界産だなんて言つても信じてもられないからな。
実際作れないこともないし。

そうしたらしつこく聞いてくる生徒が出てきたり、お前ら最初の怯えぶりはどうしたんだ、と言いたくなる。
因みに基本は誤魔化して逃げてる。
「五日ずっと追いかけつこだ。疲れた。

「どうせ貴様は田立たないわけがないのだ。いつそ医者だと名乗り、
田立てばよいだろ?」

「確かに医者と言えるけど

聖都ウエンデルは別に寄付だけで成り立つてゐる訳じゃない。
そこで高度な医療技術を学び、外で医者として出稼ぎするのも神官修行に入つてゐるのだ。

「あぐどいことやつてる奴もいたにはいたけど、そういうのはたい
てい自滅してたなあ。俺も潰したけど。

脱線したけど、俺はある程度以上の医療技術を備えてるから一応医者とはいえる。

「でも微妙なんだよなー…」

「まあ、どっちにしろすでに目立つていいのだ。もつと派手な印象を植え付けてしまうのも良いだろ?」「う

学院の先生叩きのめしておいてよく言つ。ギター先生だつて? プライドズタズタにされてたなー、片つ端から風魔法弾かれてたし。

風のスクウェアなだけに自信があつたんだろうけど、相手が悪すぎた。

竜帝は嫌らしくも風魔法ばかりで攻撃し、とどめにエアスラッシュヤー使つた時には、流石竜帝だと諦観しちまつた。

：中庭の地形がちょびっと変わつただけで済んだのは幸いだろ?。

当然だが、その後竜帝の行動に文句言つ人間は俺たち除いていなくなつた。

噂では東方最強のメイジとか、実は人間の姿をしたエルフだとか言われてるし。

そんな訳で、竜帝は人のことをいえないと思う。

「あんた達、ここにいたの?」

「探したぜ」

ルイズ嬢にサイトじやないか。

仲良くなつて良かつたけど、何か用かい?

「べ、別に仲良くなつてないわよ! それより、出掛けたから準備

しなさい」

「？」

竜帝と二人、顔を見合せた。

「リュウウトイはこりないだらうが、あんた達の武器とか買つこいくのよ。あと、私の用事」

曰く、近々舞踏会があるから小物を買つにいくらしい。
…女の子の買ひ物つて長いんだよなあ。シャルロットなんかすげく長かったし。

武器を買つてくれるみたいだけど、正直求めるレベルの武器があるとは思えない。
まづフレイルあるか怪しこし。それに…。

「残念だけど遠慮しておくれ。一人でトートしておこで」

「でででトートですつてー?」

「うわ、わかりやす」。

サイトの方もほんのり顔を赤くしてこらし。

「テードだら。お兄さんほんとこで行つてきな」

「お兄さんつて…イオ何歳なんだ?」

「29歳」

「「嘘ー?」「

ハーフエルフは成長が遅いんだよ。
肉体的には15、6歳だが。

「ヒレオノールお姉様よりも上だなんて…エルフってみんなそんなの?」

俺は成長早い方だよ?

まあエルフが人間とは比べものにならない寿命を持っているのは否定しないけど。

「それはともかく、呆けてないで出掛けといで。お兄ちゃんは忙しいから」

「お兄ちゃんってこいつよつおじさんだろ」

うつさい。

そんなこというとハリセンで頭たたくぜ。

「もう、いいわよ! 行きましょうサイト」

そういって二人は去つていった。

いや、決して女の子の買い物面倒だとそういう理由で遠慮した訳じゃないからな?

……空しい。

*

時は過ぎて夕刻。

それまで何してたって？ 魔法の植木鉢を作つてた。

倉庫整理してたら、倉庫に武器防具の種とか魔法の種が大量に出てきたんだ。

少しは入れてたけど、こんな大量は全く身に覚えがないんだが。

偉大なる元主様、おしえてー？

「ん？ …ああ、まだ我に忠実だつた頃に、ガラスの砂漠で狩りまくつてたぞ」

「何で？」

「知るか」

命令されてたわけでなかつたらしい。

まあ俺だし、多分モンスターがうざくてエインシャントあたりを連発していたのだろう。

…なぜ素直にテレポートしなかつたんだ？

何にせよ種が大量にあるのは良いことなので、本氣で植木鉢を作つてみたのだ。

この世界はマナが多いから楽だわー。
さてさて、早速何か植えてみよう！

ちゅぱじおおん！！

「な、何だあー!？」

慌てて辺りを見回すと、学院の塔の一つにひびが入っていた！

…あれやつたの、ルイズ嬢、じやないよな？

「む、あんな所に小娘の姿が」

「流石、悉く俺の期待を裏切ってくれるな竜帝

なんてこいつたい、流石に怒られるだけじゃ済まんだろう。ひび

すると。

「どーん!」という効果音がまさしく似合つ巨大な「ゴーレム」が出現した！

…え、どびにこいつことー!?

「泥棒だらう。確かあそこは宝物庫だといつていた」

「ちよ、それまずくね?

しかもサイト達何か戦う気だし!」

ああもうー。

「イビルゲートー!」

全てを飲み込む闇の渦が「ゴーレム」を中心に生まれる…が詠唱破棄だ

と流石に全部消すとまで行かないか！

ゴーレムを半分飲み込んだところで効果が切れる。

しかし、それが嘘かのように瞬く間にゴーレムは再生した！

「どうやら土とつながる限り再生できるらしいな」

「面倒な…」

イビルゲートの上位呪文、ダークフォースの詠唱を始めるが、完成する前にゴーレムは何かを持ち去った！

なんつう逃げ足！

はあ。ダークフォースの詠唱を中断してため息をつく。

「絶対面倒事だ…」

我ながら運がないな。

竜帝は面白そうに笑つてゐるけど。

「いや何、思いの外貴様の慌てる顔が面白くな

こんなことなら操り人形にせずに最初から素で協力させればよかつた、と一人ごちた。

…畜生、あの時下克上しつければよかつた！

盗賊騒ぎ（後書き）

魔法の植木鉢：

種を植えると一瞬でアイテムが手に入る植木鉢。
宿屋に普通に置いてあるので知識があれば作れると捏造。

エインシャント：

無属性魔法。空から隕石を降らせるが、ここでは本物降らせるわけ
でなく、魔力で生み出した岩を降らせるものとする。
一応本物を降らせることは出来なくもない。

凄まじい破壊力を誇るがその分消費も大きい。何気なくイオの得意
魔法である。

イビルゲート：

闇の初級魔法。対象を起点に闇が全てを飲み込む。

ダークフォース：

イビルゲートの上位呪文。対象を闇に引き込み、全方位から攻撃す
る。

全体攻撃をするとエフェクトが派手になる。

エアスラッシュヤー：

風の神獣の必殺技。

凶悪な風は沈黙（詠唱不可）状態へ陥らせる。

本来の威力なら中庭が余裕で全壊するが、手加減された模様。

テレポート：

敵の幹部さんだけが使える転移魔法。

因みに、アンジェラも呪文を覚えればできただろう魔法である。
転移距離に比例して消費が大きい。

魔法に関しては基本ゲームですが、記憶が曖昧なところがあるんで間違つてたら指摘して下さい。

イオの年齢が明かされました、実は一歳サバ読んでます。死んでる間はカウントにはいるのか微妙ですが。

ちなみにギター先生はその長い鼻を叩き折つたら面白やうという理由で喧嘩ふっかけられました。
この竜帝フリーダムすぎる。

ギター先生に祝福あれ。

少し訂正しました。

破壊の杖を取り返せ！（前書き）

フーケ捕縛編。捕縛…編？

破壊の杖を取り返せ！

おっすおらイオ！ … 電波を受信したみたいだ、忘れてくれ。

予想通り面倒事になつた。

学院の宝が盗まれたことで、急遽盗賊フーケ討伐隊が編成されたのだ。

その討伐隊のメンバーの中には、ルイズ嬢も入つてゐる。我らがご主人、ルイズ嬢が行くんだから当然使い魔も駆り出される訳で、今馬車に揺られる状況となつた。

知らんぷりしようかと思つてたけど、イビルゲートをばつちり見られてたもんに行くしかないし。

「…畜生、俺は回復しかやらないからなー」

「何でそんなに嫌がつてるんだよ？」

ただの理不尽な反抗心だ。要するに言つただけ。

そりやあまあ盗みは悪いことだ。

悪いことだけど…教師が討伐隊に参加せず、生徒だけつてのに納得がいかない。

見たところタバサとロングビルさんは中々やるようだけど、あとは

実戦経験なし。

歴戦の盗賊にこれは酷い。やる気もなくすつてもんだ。

「それよりサイト、何で剣を一振り持つてるんだ？」

「あたし達のプレゼントよー。」

「ほつほつ、モテ男の自慢かこの野郎。

でも…。

「「」ちの綺麗な剣、こりや飾り用の剣だな。実戦には耐えれないぞ」

「ええ、そんなことないわよー。千エキューもしたし、店主だって一杯褒めてたのよー。」

「千エキューがどれだけの価値かは知らないけど、事実だ。少なくとも素人に持たせるようなもんじやない」

勝手に拝見しといて酷い言い草かもしれないが、事実である。これが使うのがデュランだつたらマシだけど…いや、本人の性格上使わないな。つかキレるな。

これでもう一つも酷いようだつたら、サイトは戦力外通告だが、さて。

「やるじゃねえかルフの兄ちゃん、あっさり剣の質を見抜くなんてよ」

「…喋つたー?」

鞄から抜いた瞬間、もう一つの剣が喋り出したのだ！

勝手に動き回る剣なら幾度も見たことがあるが、流石に喋る剣なんて初めて見た。

じつと剣を見つめると、何やら魔法が掛かっているのが判る。これが喋る正体か？

しかし。

「これ凄いな…所々錆びててボロいけど、手入れすれば十分使えるレベルだ」

「おうよ、このデルフリンガー様は守るための剣だからな！
その辺の剣と比べられちゃ困るつてもんよ…」

へえ、守りの剣か。

「その心、気に入った！
と言つわけでサイト、これが終わつたら『テルフ』といつちの剣の手入れな」

人から貰つた物は何であれ大切に。

しかし竜帝退治の時叩き込まれた知識が役に立つとは思わなんだ。

竜帝といえば。

「よくついてきたなー」

ふよふよと浮いている竜帝に問いつか、素直に乗れよ。

「…暇つぶしだ」

ん？ 何か間があったよ？

「竜帝、何か隠してないか？」

「…眞つまびの」とではない

「氣のせいだ。やつて竜帝はそっぽを向いてしまった。

「もうすぐフーケを撃した廃屋です。氣を引き締めて下さー

ロングビルさんが着めるよひで言つた。
すこませーん…。

馬車を降り、鬱蒼とした森を歩く。

暫く歩くと開けた場所にでた。廃屋がある、あれか。
だが人の気配がない。居るのか、本当に？

「作戦会議」

ちよこん、ヒタバサが地面に正座した。そして枝を使って絵を描く。
ようやくあるといひだ。

囮兼偵察役が先行、フーケがいれば挑発して外にでたところを集中砲火。

いなければ合図、といつた真合だ。
で、その囮だが…。

「どうして俺を見るのかなみんな？」

「だつて…なあ？」

「紙切れだけでメイジを圧倒した。動きも早い

「すごい魔法使うし」

「それにエルフなんだからどうでもなるでしょう？」

まさに集中砲火。ひでえ！

「俺は回復が専門なんだよ！」

「つべこべ言わずに行つてこい」

「げしつ！」と竜帝に蹴られた。

…覚えてる、種から良いもの出てもやらないからな！

「つか…やつぱいなじやん」

小屋を覗いて誰もいないことを確認し、合図する。みんな恐る恐ると言つた具合でやつてきた。

タバサは罠がないことを確認し、中へはいる。キュルケ達も続いたが、ルイズ嬢は見張りをするといつて残つた。ロングビルさんは見回り。

俺も見張り組だが…ルイズ嬢落ち込んでないか？

「どうしたのさへ。」

「…何

「落ち込んでるようにな見える」

ルイズ嬢はハツと目を見開くと、すぐに俯いた。

「別に落ち込んではないわ。だってフーケを捕まえればお手柄だもの」

「そうか？」

「氣のせいかな？」と、思い直すと、急に影が懸かつた。

…ん？

振り向くと、拳を振り上げているゴーレムが目に入った…ってええええ！

「ルイズ嬢！」

「きやああああつー」

間一髪、ルイズ嬢を抱きかかえて離脱。

しかしゴーレムは廃屋の屋根を破壊した模様。竜巻と炎が起こり、直後三人が離脱してきた。

「おおおお、降ろしてー！」

「あ、忘れてた」

ほい、ヒルイズ嬢を降ろす。軽くてよかつたよ。

そういうじてる間に「ゴーレムが距離を詰めてきた。すると、ほんっ
！と一部が砕け散った。

背後から聞こえる声で、ルイズ嬢の爆発だと判断する。

「何してんのヤー。」

「あいつを捕まえるのー。」

そう言つて何度も何度も爆発を繰り返す。
けれど少し削れるだけですぐ再生してしまう。

「ルイズ嬢、退くんだ！　！」は俺が何とかするからー。」

「それじゃ、あんたに頼りっぱなしじゃない！　私は貴族よ。

魔法を使える者を貴族と呼ぶんじゃない、敵に後ろを見せない者
を貴族と呼ぶの！」

そう言つて詠唱した呪文を解き放つ　　また爆発。
「ゴーレムとの距離はもうない！

「ああもうつー。」

再び抱き抱えて回避！

殴られた地面が陥没して、間一髪だ。

「君、本当に心臓に悪すぞ……」

思いつきり脱力してしまつ。

竜帝はげらげら笑つてゐし……手伝えよ。

「つ……めんなさい」

「何にせよ、怪我なくつて良かつたよ」

タバサの風竜がきたし、あとは任せよ。しかし、『コーレム』ひとつやつひとつけようか?

すると、竜帝が田の前に降りてきた。

「小娘の言葉と貴様の脱力ぶりが氣に入った。特別に我が木偶の坊をやつてやる」

脱力に着目すんな。つか、聞き違いじゃないよな?

「……貴様も対象に入れてやる」

「イエ、結構デス」

そのマナの集まりよつはあれだろ、神獣の一撃クラスだろ。そんなもん生身で食らいたくねえよ!

竜帝の周囲に集まつた膨大なマナが凝縮される。

「『ゴールドブレイズ』

ゴーレムが、凍りつき砕け散った。

破片から漏れる冷気が肌を突き刺す。

その場の全員が息を飲んでいた。

…が、これも本来のものより威力が低い…いや、範囲を凝縮したのか？

少なくとも雪だるまにはなってないし。

「嘘やんじ無事ですか！？」

「ミス・ロングビル！ フーケはどうでしたか？」

「申し訳ありませんわ。流石名高い盗賊、逃げられてしましました」

「そう…ですか」

あ、ルイズ嬢また落ち込んでる。

元気づけようとしてが、サイトが明るく告げた。

「破壊の杖は取り戻したんだ！ 大手柄じゃないか！ …こんなもんがこんなところにあるのが謎だけど」

何かぼそっと聞こえたぞ。

かくして、盗賊事件の幕は下りたのだった。

破壊の杖を取り返せ！（後書き）

竜帝はきまぐれ。

まさかのフーケ未捕獲。まあ彼女もエルフが近くにいた時点で微妙に諦めてただろうけど。

精霊魔法 >> 越えられない壁 >> 系統魔法なのかな。

原作読んだの数ヶ月前だから忘れてしました…。

コールドブレイズ：

水の神獣の必殺技。食らった相手を雪だるまにする。

雪だるまかわいいよ雪だるま。

すぐ直るのでついつい放置が多かつた記憶が…。

不穏の陰（前書き）

武器防具の種、いいですよね。
ただ、ムーンハウバーが六回連續で出たときは泣いた。そんなにい
らん！

不穏の陰

破壊の杖を取り戻した翌朝。

昨日はパーティーと云つておいしい、飯を食べれたし、気分は最高だ。

そして今、植木鉢の前にいる。年甲斐もなく、ワクワクが止まらない。

倉庫から武器防具の種を取り出し、そつと植えた。

むくむくつ！

そして数秒後、あつといつまに花を付け、中心から一つの武器を吐き出した！

「おっしゃあああー！」

大成功！

知識はあつてもきちんと作れなきや意味ないもんなー。

早速創られた武器を手に取る。

「おお、流石に軽い

武器防具の種で創られた武具は、使い勝手がいいんだよな。肝心の種は凶悪なモンスターが持つてるから普通は滅多に手に入らないけど。

「何を騒いでいるかと思えば… それはベルティナモールか。武器防具の種を使ったな？」

「だつて武器必要じやん。ハリセンは武器じやないし」

「俺の主武装はフレイルなのだ。

剣なんて素人に毛が生えたぐらいしか使えないし。
それにわざやかに楽しんでも良いじやん！」

「思い出すな…貴様の妹はジャッジメントで我の鼻面を殴つてき
たことを。

「む、腹が立つてきた。おーイオ、殴らせる」

「理不尽だー!？」

「ふあ！

割と本気で殴りやがつたな…頭痛ー…。

「ヒールライト」

優しい光が傷を癒す。

ん、流石俺、もう大丈夫だ。

頭殴るなよ全ぐ。

「…「ひるせこなあ、何の騒ぎだよ

テントからもぞもぞとサイトが出てきた。

「お前らが早いだけだろ…「ふあ

「お前らが早いだけだろ…「ふあ

まあ、生活習慣だからな。

それより昨日は良かったな、ルイズ嬢と踊れて。

「でも、最初に誘われたのはイオだろ？ 良かったのか断つて」

「サイト、良いことを教えよ。俺はダンスすると、怒られるんだ」

「はあ？」

「いや…きみんとステップ踏んでるまんなのに足を踏んじやつたりなんてザラで。

妹と弟に特訓して貰つたけど直る見込み一切なし。

妹になんかもう踊るなーと叱られたな…

酷いぜシャル…兄ちゃんはせせんと特訓してたの。ヒースも苦笑してたし。

「…苦労してたんだな。つか、兄弟いたんだ」

「可愛い弟妹だ」

ヒースに身長抜かれたときは号泣したが。

ちなみに、俺はサイトよつちよつと背が低いぐらうだ。ちよつとだからな。

「…ふう」

「…笑うなつか心読むな

*

あれから数日後。

今日も今日とて暇だ。

基本、使い魔は主人と一緒に行動するのが常だが、その辺はサイトに任せつ放しな俺らである。

竜帝はふらりとビックへ行くし、俺も探検と称して空の旅を楽しむことがある。

主教に教わった飛行術がここで役に立つとは思わなんだ。

主教は使いすぎだけど。

ん、主教の名前？ ノーノメントで。言つたらどんな呪いがくるかわかったもんじやない。

ふわふわ浮いていたら、何か派手な馬車が遠くに見えた。
結構な上空で見てるから距離感が掴めないけど、数時間後に学院にやつてくるっぽい？

…あれ、俺やばくね？

学院では付け耳だとかエルフらしくないエルフだとか散々言われてるけど、一応なじんでる。

だが外となると…最悪、その場で戦争になりかねないかも？

大慌てで学院へ戻る。

そしたら、なんか変な風にめかし込んでるゴルベール先生に出会つた。

「やあやあイオ君！」

「ゴルベール先生、おめかししてるけどひつたんですか？」

「ああ、急にとある尊き方々がやつてくることになつてね。

ああそつだ、君は出来れば隠れてもらえないかい？ 学院ではもつれほじではないけど、ゴルフはあまり印象よくないからね」

尊き方…。王族かなんか？

どちらにせよ見つかれば面倒事は避けられない。

ゴルベール先生にしつかり頷く。

さて、エリに隠れよう？

「とづくわけで助けてシルフィー！」

「ええい！？」

結局、戻つてタバサの風竜、シルフィードのところへ隠れるエリにした。

…驚かせちゃつたかな？

「ええいきゅー！」

「いだつ…？」「めん、悪かつた、怒らんで…」

ベジベシヒロで呪かれた。

出でこけつて」とつぽいが… ももこももこじやわからん。
それにして…。

「シルフィって可愛いな

いやねや、ドラゴンなのにここに可愛い。

元の世界のドラゴンには良い思い出があんまりないが、この世界の
ドラゴン… つかシルフィは好きだ。

つぶらな瞳！ 青い鱗！ 立派な翼！

ビリヤの竜帝とせ比べものにならん位可愛い。
まああれはどちらかといつと格好良い、恐ろしいが先に来るし。
そういうえば最近本性見てないな？

シルフィの顔にもたれて、空を見上げる。諦めたのか、もう抵抗は
ない。

「……真つ正面から可愛いなんて、照れるのね」

ん？ 誰か喋つた？

わよわよわよわよと見回すが、気のせいかな。

それにして… 聞くなつてきた。

「ももこ？」

「「めん、ちよつと寝かせてー…」

かくんと、意識が沈んでいくのを感じて、俺は眠りについた。
何故か懐かしさを感じて。

…目が覚めた後、再び面倒事になるとは思わずだった。

不穏の陰（後書き）

シルフイ好きすぎる。
さて、どうしてイオは懐かしさを感じたのでしょうか。

ベルティナモール

武器防具の種で手に入るフレイル……と言つていゝのか不明なぐらい
攻撃力の高いフレイル。

一応手に入る中では最弱なのだが、普通の武器とは比べ物にならな
いほど性能がいい。

ジャッジメント

プリーストが装備できるフレイル。一応メルティナモールよりは威
力が高い。

これらの装備はあくまでモンスター対応で、人に向ける装備では
ない。

イオのクラスが謎すぎる……。

設定しといてあれですが、元クレリックレベルじゃないぞ貴様。

拉致られて白の国（前書き）

まさかすぐ死る人物が登場。

拉致られて白の国

突然ですが、拉致られました。竜帝。

シルフィイの体が思つたより寝やすくてついに爆睡してたら、叩き起されたその一言。どう思つ?

置き手紙するまもなく、あつと声の間にテレポート。そしてついたのはどこかの城とおぼしき場所。

…どういう状況だ?

「リュウテイ殿、お待ちしておつりました! 皇子達がお待ちです」

やつてきた文官らしき人にせられて混乱。えつとつまりな。

「状況を説明しろおお!」

かくかくじかじかで文官さんが話してくれた事によると、ここはアルビオンらしい。

空に浮かぶ白の国で、さらに言つと大絶賛戦争中の国だ。

で、何故俺が呼ばれたのかは知らないらしい、と玉座へ向かつまで教えて貰つた。

今こるのは玉座への扉の前だ。

白く美しい、莊厳な扉を竜帝は遠慮なく開いた。

「連れてきてやつたぞウェールズ」

「ああ、ありがとウリュウティ殿。しかし彼は…本当にエルフじゃないか？」

そう言つて現れたのは金髪の整つた顔立ちの、いかにも王子様といった風貌の青年だった。

当然だが警戒されている。

「…どうも、昼寝してたら拉致られましたハーフエルフのイオです」

「ハーフつ…？」

何か水をふっかけたような騒ぎになつた。

ルイズ嬢の反応もこんな感じだったな、懐かしい。

「静肅に！ 王の前ぞ！」

宰相らしき人の一声で玉座の間は静まり返つた。

ただ、睨みつけるような視線じやないが、何か粘つこい視線がくるのはちょっと…。

居たたまれなくなつて竜帝に視線を向ける。

「竜帝、いきなり拉致つて何の用だよ本当に」

「すみません、イオ先生。俺が無理を言つたんだ」

「！？」 いの声！

慌てて声のしたほうへ振り返ると、真っ赤なマントが目に入った。紅蓮の炎のような赤色。

それを身に付けてるのは 。

「紅蓮の魔導師！？」

「久しぶりですイオ先生」

かつてアルテナ最強と謳われた紅蓮の魔導師その人だった。だが彼はテュランとの決着をつけて自爆して死亡した筈だ。どうしてこんなところに…まさか！

「紅蓮さんも光の帯を通ってきたのか？」

「いえ、何もない空間を漂っていたら引っ張られて…」 いのいるウエルズ皇太子達に救われました

そういうて紅蓮さんはばつが悪そうに俯いた。

「…あの日は本当にすみませんでした」

「あの日…ああ」

食われた日か。とは口に出せなかつた。

「そりやあ何で俺が、とは思つたけど気にしないよ。気にする暇もなかつたし」

主に隣にいるアリソンのせいだ。

まあ結果的に生き返れたし、何より紅蓮さんが元に戻つていて嬉しいな。

最後に見たのは人形みたいな無表情だったし。

「それで、ここに呼んだ理由は何？ 確かこの国は戦争中だったと思つんだが」

「そうだ、戦争だ」

心底楽しそうに龍帝が言った。
…まさか。

「戦争に参加せらる氣か？」

「いや、紅蓮の魔導師を見つけたので会わせてやれりつと思つただけだ」

「龍帝様が城に乗り込んだときは何事かと思つましたが…」

がくつ！

いや、戦争に参加しないじゃなくて良かつたけどー

つーか何してんのだ龍帝ええ！

「じゃあ何で俺を呼ぶのにこんなに仰々しいんだよ…」

「紅蓮の魔導師殿には世話になつぱなしでね。私も王も魔導師殿

の歸となるといふ無礼でないんだよ」

「…紅蓮さん！」の國で向したのを。つか俺は師匠じゃない

「取り合へずマシンゴーレムを試作したり、反乱軍を蹴散らしたりなどをする」

そう言えば紅蓮さんフォルセナ城陥落寸前にしたんだだけ…。

どこのか遠つて目をして紅蓮さんの話を聞く。

周囲の方々も口々に言つ。

「あのゴーレムはすばらしい。たかがゴーレムと侮っていた反乱軍をあつと詰つ間に蹴散らしましてな！」

「魔導師殿も我々が見たこともない魔法で反乱軍を一掃したり、大活躍でした！」

べた褒めである。

…紅蓮さん、ちょっと戦争終わつたらじつへり話しあおつか。

「もうひと頑張りすれば反乱軍を鎮圧出来る、と言つたところで竜帝様に再会しまして。

イオ先生も一緒にこなとこついと、つい竜帝様に頼んでしまいました

「…もう向も言わんよ」

頭が痛い…。紅蓮さんってこんな性格だつたか？

テレポート使って帰るうかと思うと、こり良い笑顔の皇太子が

そこにいた。

「是非ともおもてなしをしたいんだ。泊まつていくと良い」

「…あの、俺ハーフエルフなんですよ？ 半分は貴方達の嫌いなエルフ」

「紅蓮の魔導師殿の師匠なんだ。悪い人であるわけがないよ」

だから師匠じゃないんです。

ちょっと精靈を訪ねて力の使い方を教えてあげただけなんですけどー！

「それに、貴公の話はかねがね聞いている。ああ、勿論魔導師殿からね。それに」

異世界の者だと云ひ「ともばっちりね」と囁かれた。…紅蓮さんどこまで話してゐるや。

結局異世界の王族に対する拒否権はなく、なし崩しに王城に泊まることになってしまった。

帰つたら怒られるよな…はあ。

翌朝。

いつも通りほほ田の出に起きた俺はいつも通りお祈りをする。女神様、今日こそは帰れますよ！」

ルイズ嬢達のお怒りが怖い。

やること特にないし散歩でもするか？

と、考えていたらいきなり竜帝がやってきた。テレポートすんな心

臓に悪い！

「ふつふつふ。散歩と称して外へ行く気だろ？？」

バレてーら…。しかし、早起き珍しいな。

「ん？ 少々熱が入つてな、敵の飛行船を落としていたら朝になつてただけだ。」

戦争満喫してやがる。

敵さんご愁傷様…冥福を祈つといつ。

つて、おかしくないか？

「時間掛かりすぎじゃん。本来の姿ならそれこそ一瞬で終わるんじや」

「…言つてなかつたな。何故か戻れんのだ」

え？

「嘘だろ。竜帝サマがドラゴンに戻れないなんて」

「笑えない冗談だが、事実だ。今は力が制限されている」

このルーンのせいか？と竜帝はつぶやいていたが俺にはそんな兆候全くな。

マナだつて最高に満ちてるし、むしろ死ぬ前よりも調子がいいぐらいだ。

けれど竜帝の体には制限が掛かってる…謎だ。

朝食に呼ばれるまで竜帝の体を診たが特に異常はなかつた。
どういふことなんだろう?

拉致られて白の国（後書き）

といつわけで紅蓮さん（本名不詳）登場。これでパーティ組めますね！

紅蓮さんも性格捏造。敬意を払うのは恩人と上司と師匠のみで、基本はゲームの高慢ちきではあります。

紅蓮さんのステータスもほぼボス戦と同じ。
よく考えたら…こいつら近接担当いねえええ！

マシングゴーレム：

アルテナが誇る魔導兵器。紅蓮さんは知識だけ持つて自分では作れないという設定。

土メイジが部品を組み上げ何とか旧スペック（HOMぐらじ）レベルまで汲み上げた。

操縦者いらず、単体でかなりの広範囲を攻撃できる上頑丈。

因みに紅蓮さんは単体で攻城戦ができる（主人公がデュランの場合参照）

紅蓮さんは大砲、竜帝はただのラスボス、イオはバランス兼回復役というパーティ。あれ一名おかしい。

紅蓮さんがあそこまで信頼されている経緯はまた次回。

追記しました。

紅蓮の道程（前書き）

今回は紅蓮さんの昔話。 タイトル変えました。

私は夢を見ているのだろうか。

かつて圧倒したはずの傭兵は、私が師と仰ぐ人を打倒してきた。そして、今私さえも圧倒している。その事実に少なからず動搖している私がいた。

どうして負ける！？

師を生け贋にした日に私は絶対の力を手に入れたのだ！女王にも、王女にも負けない圧倒的な力を！

（ これで私達、もう馬鹿にされないわね！）

王女の声が脳裏に甦る。

…いつした話だったかな。もう一年は前の話か。

ずっと憧れていた魔法の力を、精霊の補助で発現できた日だったか。

王女の身に宿る力は莫大で、私はちっぽけな存在だったのを思い知らされたな。

竜帝様の誘いに迷わず乗ったのはそのせいだったと思つ。

…ああ、もう記憶はこんなにも曖昧か。

蘇つた師と違い生身の私は回復手段さえ持たない。

回復はできない。だがあの傭兵はとどめを刺そうともしない。いつそ恐ろしいほどのまっすぐな目で私を見つめていただけだった。

勝者の情けか。だがそんなものはいらない。

戦えないのなら、私にもつ価値はない。

小さく、小さく呪文を唱える。あの傭兵が気づいた瞬間、呪文が発動し私の体は爆炎に包まれる。

“まあみる。貴様などに情は賣わん。

そう思ったのが最後、私の意識は完全に途切れた。

それから幾時が過ぎたのだろう。

何も感じなかつた意識が突然戻つてきた。

どこを見ても何もない空間で、ただひたすら漂つていたらしい。らしさといつのは、戻ってきたとはいえ未だに意識があやふやだからだ。

主とあの傭兵達はどうなったのだろう。

ただ判つているのはこの空間に終わりがないことぐらいだ。

私はこのままここを漂い続けるのだろうか。
師匠もここにいるのだろうか。

ぼんやりと考へていると、急に何かに引っ張られた。

何だ、と考える暇もなく引きずりこまれ、地面にたたきつけられる！

「ぐあっー。」

相当の高さから吊りつけられたようだ。
痛い　と考へて違和感を覚えた。

私は死んだはずだ。肉体の感覚があるはずがない。

だが現実として叩きつけられた身体は痛みを訴えている。
回復魔法を、と考えたが自分には使えなかつたのを思い出した。身
内で使えるのは師ぐらいだか、都合よく居るはずもなく。

（こんな訳の分からぬ状況でまた死ぬのかー？）
死んでたまるか、と歯を食いしばつたとき。

「　大丈夫か？」

救いの手は、現れた。

アルビオン王国皇太子、ウェールズ殿下とその配下だつた。

彼らは親切にも傷つき倒れていた私を手当すると、王城へ連れて行
つた。

そこで交わした会話で、私は異世界に来たことを認識させられた。

レコン・キスタとやらの兵だと思われていたことも判つたのだが
それは割愛しておく。

異世界など来たことがないからどうすればいいのか判らなかつたが、
幸いこの世界も魔法があつた。

とにかく身分の保障を求め、魔法の実力を認めさせ、やらでマシン
ゴーレムの設計図も起こした。
内乱中だといひこの国で、信頼を得るため一兵卒として戦争にも加
わつた。

竜帝様に賜つたこの力は異世界に来ても衰えはなく、ただの人間な
ど塵のよろに吹き飛ばした。
…神官だつた師匠が見れば怒られるだらうが、生きるためだ、後悔
などない。

最初は疑念しか向けられなかつた田も、少しずつ信頼と恐怖を交え
るようになつた。

毎日が充実していいたと自信を持つていえる。

気がつけばウエーレズ皇太子とは、異世界出身であるといひことを
明かす仲にまでなつていた。

最初は王家に身分を保障して貰つだけのつもりだつたのにな。

そして内乱はほとんど鎮圧し、あとは仕上げばかりになつた。

そんな折だつた。

「 む、紅蓮の魔導師か？」

「竜帝様！？」

「ゴーカツスル城へ現れた不遜の輩。
それを退治するために赴いたとき、そこにいたのは我が主竜帝様だ
つた。

主は退屈しのぎにやつてきたと言つた。
遙か遠いトリステインには師匠もいるらしい。

なんという巡り合わせか。
初めて女神に感謝したかも知れない。

主は本当に退屈しのぎでやつてきたらしく、私がこの城を守つてい
ることを伝えると、つまらなそうに攻撃をやめてくれた。
代わりに内乱中であり、アルビオンの周りには敵しかいないことを
伝えると、主は愉しげに協力してくれると仰られた。

そして国王達に主の紹介を済ませ、数日が過ぎた頃。

主は急に師匠を連れてきた。
私が以前こぼしたこと覚えていて下さつたらしい。

数ヶ月ぶりに出会った師匠は生前のままだった。彼も甦つたらしい。

「お久しぶりです、先生」

師匠は『師匠』と呼ばれるのを非常にいやがっていたのを覚えてい

たので、妥協する。

師を怒らせれば怪しげな薬の実験^合されかねないからな。

久しぶりに会つた師匠は、あの一年間のことと微妙にしか覚えてないらしかつた。

師匠が主に甦らされた直後の苦に記憶を掘り返せずに済みそうだ。
良かった。

…今だから思うが、あのときの自分は本当に調子に乗つていたしな。
師匠に徹底的に呪きのめされていなければ、あの彌々しい勇者共に
瞬殺されていたぐらいに傲慢だった。
本当に良い師匠を持つた。

ただ、幾ら自分が力を得るためとはい、師匠を生け贋にしたこと
は後悔していた。

以前、そのことを謝る機会は全くなく（師が自我を取り戻した直後
ウェンデルへ行つてしまつたこともあって）それだけが棘のようにな
突き刺さつていた。

だが、それも今田で晴れた。

師匠たちは王子の勧めで泊まることになつたし、話をたくさんした
い。

…どうとなくいやな予感もあるが、それやかながら宴の準備もして
もらおう。

そつ言えば師匠は下戸だったよつたよつた。

ジユースもあればいいが。

紅蓮の道程（後書き）

紅蓮さんがここに来た経緯を大ざっぱに綴つてみました。
相変わらずの性格捏造。

紅蓮さんのやつたこと：

- ・マシンゴーレムの設計図を描く
- ・戦場でレコン・キスタを叩きのめす
- ・ウエールズ皇太子の恋の悩みを聞く etc.

因みに、紅蓮さんとイオががちでやり合つとイオが圧勝します。
回復・補助魔法というアドバンテージは偉大。

本領発揮！（前書き）

今回やうじつと残酷かも。

本領発揮！

イオだ！

朝食を食べた後も竜帝の身体を診たけど、原因不明すぎる。一応あらゆる呪術修めてるんだけど、どうしようもない。

紅蓮さんはすでに知つてたらし。

この手の専門家の俺に何故聞かなかつたと突つ込みを入れたいが、紅蓮さんは竜帝至上主義なのでどうせ聞いてくれないだろう。昨日の説教だけじゃ足らなかつたか…。

紅蓮さんにどうやって説教をしようかと考えてると、ウホールズ皇子に声をかけられた。

「イオ殿、少し頼みがある。貴公は優秀な治癒術士ときいてる。此度の戦争で傷ついた者を手当してやつてくれないか？」

「ん？ ああ、いいですよ」

忘れるところだつたが戦時中だつたな。
しかし王族が使い走りつてどうなんだろ？

皇太子に案内され、救護室っぽい部屋へ辿り着く。予想していたより怪我人が少ない。

「これだけですか？」

「ああ、紅蓮さんのおかげで随分楽になつてね。彼には感謝しても

しきれない」

下手すると王国軍は敗北していたからね、と皇太子は呟いた。よほど苦しい戦況だったのだろう。

応急手当の上にしつかりした処置をしつつ、皇太子の話を聞く。

今日の戦いで決着が付くかもしれないらしい。

昼頃出陣で、皇太子は緊張を解すために俺をここに案内したらしかった。

ヒールライトと薬を併用する手当を、皇太子は興味深そうに見ていた。

「私達の魔法で言えば、治癒は水メイジが専門なのだが、そちらは光なのかい？」

「昔はヒールウォーターってのもあつたらしいですよ。ただ、今は回復と言えば光が主流ですかね」

「ほう。紅蓮さんは攻撃的な魔法しか使えないようだつたけど、他にもあるのかい？」

ありますよー。

俺たちの魔法は八属性あつて、素質があれば個人の波長にあつ属性が使える。

例えば俺は、地水火風とはあまり相性がよくない。

使えるのは精々セイバー魔法ぐらいだが、光と闇に関してはその逆に吸収してしまうぐらい相性がいい。

月と木もまあ相性は良い方だ。この二つは補助的な面が多いけど。

簡単な説明をすると、皇太子はさうに田を輝かせた。

「素質があれば誰でも使えるのか。では私にも使えないかな?」

「どうでしょうね? 精霊達がいれば教えてくれるんですが?」

八精霊はもういない。マナが消えると同時に消えてしまった。
だから精霊魔法が使えるかなんて あれ? おかしくないか?

精霊がいないなら何で魔法が使えるんだ?

確かに最終決戦でテュラン達は魔法を使った。だがあれとは状況が
違います。

…恐ろしい考えが過ぎつた。『マナ』とは何だ?

身近にあって当然だと思っていたのに、今は酷く得体が知れなく、
恐ろしい。

「イオ殿?」

「…つ! 少し考え方をしていました」

今は深く考えないで! 今は怖くないが、怖い。

何も考えないよつこ、治療に集中しよつ。

その甲斐あつてか、負傷者は幾分か戦線に復帰出来るよつになつたが…心は晴れなかつた。

はあ。

こう、頭使うの苦手なんだよな〜。
なんかこいつ、すかつとしたいんだけど…そうだ！

「皇太子殿下、お願ひがあります」

とこつわけで、紅蓮さんの護衛をすることになつた！

え？ 何がとこつわけであつて… 暴れるためだ！ 殺しはしないつも
りだけど。

フードを被つて意氣込んでいると、紅蓮さんが心配そうに見ている。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫さー それより怪我するなよ、治すの面倒なんだからな

軽い調子で言つてやると、紅蓮さんは誰に言つてるんですか、と毒
づいた。

今回の作戦は単純だ。レコン・キスタの頭領が籠城しているどつか
の町だつたかを、地域住民の安全を確保しつつ取り押さえる。

だが住民は基本退避済みだ。故に暴れることに関しては余り問題が

ない。

突入部隊としてマシンゴーレムを使い、メイジが追い打ちをかけて一気に落とす。これが作戦の全貌だ。

航空戦力は竜帝が根っこを刈り取つてゐるからな、連中は逃げれない。

紅蓮さんはマシンゴーレムの全体指揮だ。

で、俺は万一千接されたときの護衛扱いして貰つてゐる。万が一もな
いと思うが。

「マシンゴーレム、突入！」

紅蓮さんのかけ声とともに、今までゆっくりだつたマシンゴーレム
達が城へ突入する。

それからは一方的な展開だ。

ロケットパンチやら電撃やらが飛び交つて、あつと聞こにメイジ
達を蹂躪していく。

思わず眉をひそめたが、戦争だ仕方ない。冥福を祈る。

ゴーレム達によつて軍はあつと言つ間に進軍し、実にあつけなく城
を包囲した。

…あれ、俺出番なくね？

「行くぞ！ 今こそ我々の手で反逆者どもを討ち取るのだ！」

「「おおーっ……」「

ウェールズ皇太子のかけ声で一気に突入。本気で俺いらないな！？そのまま制圧かと思われたが、そこで歯車が狂った。

「なつ、マシンゴーレムが！？」「

城に突入したマシンゴーレム達が矛先を変えたのだ！その凶弾は最前線にいた俺たちに集中する！

「イビルゲート！」「

とつやに闇を生み出し、攻撃を吸収する。

「どうなつてゐる？ まるで魅了でも掛けたみたいだ！」「

「その可能性が高いです！ マシンゴーレムは設計上、味方に攻撃するにはあり得ません！」

そう言って紅蓮さんは敵となつたマシンゴーレムを焼き払う。後ろの軍はシールドを張つて堪えてるが、こつまで持つか怪しこよひがない！

紅蓮さんも同じことを考えたようだつた。

「Hインシャントで一掃するか

「ですね。ゴーレムは作り直せばいい……」

ちよこと氣が引けるが、Hインシャントを同時詠唱する。

一重一重と重なる詠唱を止めようとマシンゴーレム達がやつてくるが、残つたゴーレム達で時間稼ぎをする。

だが俺たちの高速詠唱を邪魔するには程遠いっ！
呪文が完成する！

「星よ来たりて敵を討て！ エインシャント！..！」

古代語呪文のエインシャントは、相乗効果を持つてして、凶悪と言つていい威力でゴーレム達を葬り去る！

… 対象をゴーレム達に絞つてなきやこの辺一帯が更地になつてたな。

とにかく、ゴーレムの脅威は去つた！

けど、マシンゴーレムに黙祷。オーバーキルすぎたな、跡形もないし。

城内制圧はスリープフラーにしよう、うん。

しかし、さつきのゴーレムの反乱は一体どうこいつになんだらう？

数刻後。

皇太子に進言して、制圧作戦はスリープフラーを使うことになった。

こっちにもスリープクラウドというのがあるらしいが、使い手が余りいないらしい。

俺の使つたスリープフラーは風メイジの力を借り、城内へ眠りの

花粉を撒き散らした。

最初から使えって？

アルビオンは風が強いから対象を定めてても味方に被害がくるんだよ！

進軍途中で一人でも寝こけて見ろ、ドミノ倒しだ。王国軍つていうのは妙に綺麗に隊列つくるからな。

とつあえず、寝こけてる兵士達を縛りながら進んでいく。
卑怯？ 気にするな！

頭領さんはどこかねえ？

きょろきょろと適当な部屋を覗いてみる、

「つ！」

とつさに首を傾げると、風の刃が真横を通った。
寝ていない奴が居たのか！

持っていたメルティナモールをとつさに振るう。

がごんつ！

ちょっと人体の奏でる音じゃないぞ！？

しかしメルティナモールにぶちあたつたメイジは一瞬で床に崩れ落
ち 立ち上がった！

「なつ！」

ゾンビが何かか！？

しかし今は真っ昼間な上、闇の力など微塵も感じない。ゾンビな訳がない！

しかしゾンビもどきはメルティナモールをがつしり掴む。仕方ないので肘鉄を食らわし、ぶつ飛ばす。

だが活動を止められるほどではないか…。一応試すか。

「ターンアンデッド」

手の平を向け聖なる波動を解き放つ。

アンデッドなら一撃で昇天可能な魔法だが…どうだ？

ゾンビもどきはまるで糸が切れたかのように倒れた。一応効くらしい。

体を調べたがやはり死体だった。くそ、冒涜だ。頭領は頭いかれでんのか！

あんなのが他にいたら面倒だ。さつさと頭領見つけてふん縛りつ。

「紅蓮さん…」
「任せたぞ…」

言い逃げして無人の廊下を突き進む！

悲鳴や怒号が聞こえる。他の所もずいぶん苦戦しているらしい。まあ紅蓮さんがいるし、よっぽど大丈夫だろうが。

取りあえずもどきを見かけてはターンアンデッドを繰り返し、昇天させな。

何と云うか… 作業だ。後でちゃんと申おう。

随分高い階までやつてきたと思ひが、頭領っぽいのこないな。逃げたか?

ガシャーン！！

近くでガラスの割れる音がした。

そこだ！」

フードを押さえつけながらも必死で走り、扉を蹴り破る！

だがそこには血塗れの男性が一人、倒れていただけだった。

慌て脈を確かめたが死んでる。酷いな、首を一掻きか。
大方同士討ちか？ 何にせよ胸くそ悪い。

やがてウェールズ皇太子による勝利が宣言され、レコン・キスタは壊滅した。

だが何だろつ、この不安は？ いやな予感がするな…。

本領発揮！（後書き）

いろいろと酷いレコン・キスタ打倒編。中ボスの力の片鱗がここに！

対象云々について：

ゲームでよくあるあれです。基本的に狙いはつくけど、周囲の影響が余りに強いと狙いがそれるという設定。

特にスリープフラワーはマップ全体に眠りの花粉によく似た魔力をばらまく魔法と考えており、耐性があろうとなからうと眠つてしまふ設定。

一応対象設定はできますが、三人パーティのような少人数はともかく、軍のような大勢で攻める時の魔法としては不適切かと。気心のしれた三人パーティの連携ぐらいなければ完全に回避することは不可能。

さらに範囲広げすぎると威力も落ちるので、城みたいな密閉された空間じやないと効果のほどは期待できない設定もしています。

逆にエインシャントみたいな降下魔法は、あくまで降らせる魔法なので対象設定がしやすい設定です。威力は範囲によって変動、しかし魔力消費を大きくすれば威力そのままに範囲をある程度広げられると捏造。

今回捏造多いな！

スリープフラーー：

木属性の眠りの魔法。眠りの花に非常によく似た魔力を流し、相手を眠らせる。人形だろうと何だろうと関係なく、意志ある者に眠気を誘う。

魔法耐性の強こものなら拒むことができる。

原作ではマシンゴーレムをえ眠らせる魔法ですね。ほんと、お世話を
になりました。○△

ターンアンティックド：

名の通りアンティックド 殲滅魔法。魂を冥界へ送り返す。
高位の神官なら習得できる。

今回やけっと残酷描写がありましたが、大丈夫でしたか？

しかしあントバリの指輪の効果（死者を蘇らせる）に対してはターンアンティックドよりアンティマジックの方が良かつたかな。
曖昧な判断ですいません。

戦争終了と結婚式…？（前書き）

アルビオンから帰還。
今ならセシトで紅蓮さんもつっこひもす。

戦争終了と結婚式！？

護衛といつも田で参加した戦争は、非常に少ない被害で終結した。途中から護衛放棄したけど！

そういうば、血塗れで倒れていた男、どうやらアレが頭領だつたらしい。

元ブリミル教の司祭だつたといつ。皇太子は色々愚痴愚痴言つてたが、とりあえず器が小さい男だつたのは判つた。

でも何で殺されたんだろ？

そんなことをボーッと考えていると、突然耳を掴まれた。そして引っ張られる！つて待て！？

「あだだだーー？」

「何やら随分悩んでるではないか、イオ」

「痛い痛い！耳とれる！

どうにかして竜帝の手をはがそつとしても、びくともしない。畜生。

「いい加減に…しきつー！」

「む

メルティナモールを振るつと、流石に竜帝も逃げた。ふう、助かつた。

でも痛かつたから睨んでやる。

「何してるんですかお一方……」

紅蓮さんも呆れ顔だ。

俺は悪くないぞ、竜帝が悪いんだからな！

じつと睨んでやつたが大した効果はなく、竜帝は欠伸しだす始末。おい、反省しろ。

そこまで考えると、不意に竜帝の手に目がいった。手といつか、正確には指先の指輪。あんなのしてたつけ？

「竜帝、その指輪どうしたんだ？」

「その辺の人形から拾つた。なかなかの力を秘めていたのでな」

そう言って面白やうに指輪に目を向けた。

……碌な事にならんといいが。

あ、そうだ。

「紅蓮さん、そろそろ俺達帰るよ。向こうに心配かけてるだらう

……」

濃い数日だったなあ。もつ何ヶ月か経つたかと思つたよ。

「なら私も行きます

……ん？

耳が遠くなつたかな……。

「本気ですよ？ 重要な案件の時には戻つてきてくれと嘱咐殿下の了承も得てます」

「齎したる」

「よくお分かりで」

ダメだこいつ、すでに手遅れだ…。

大体どうやって連絡取るきなんだ、テレポートか？

世話になつた人々に挨拶をして、エントランスまで見送られる。

「テレポートなんぞ見送らなくていいのに…」

「何、形だけでもという奴や。また遊びに来てくれ、歓迎する」

「そう言つて皇太子は爽やかに微笑んだ。
そうですね、いつかかならず。」

ペコッと礼をして、テレポートを発動した。

景色が変わつた。白い城壁から緑溢れる森の中だ。

近くにはテントがあるし、間違いなくトリステイン魔法学院だ。

懐かしいなあ、そんなに離れてた訳じゃないんだが。

「……イオ？」

お、この曲は。

振り向くと予想通り、黒髪の少年
でもなんか様子がおかしい。

「……ただいま？」

「イオだああああーー！」

勢いよく抱き合つた！

ちよ！？

俺にそんな趣味はないぞサイト！

つてあああ！ 紅蓮さん呪文詠唱始めるな！
エクスプロードつて生身の人間に向けるもんじゃないから！

とにかく、倉庫から適当に何かを投げつけられた。ずいぶん一時はちみつドリンクのビンが命中して、紅蓮さんは倒した。

死んでないよな?

「で、どうしたか？」

ひくひく動いてるから大丈夫としよう。…流石に後で治療するか。

「ルイズが髪といちやこらしててえ…髪はバカにした目で見てくるし、ひつぐ、俺なんて俺なんてえ…！」

おつけ、判つた。醉つてんな」の野郎。
でも酔ひじはるが?

酔っぱらこほど面倒な者はない。相変わらず抱きつかれたままで懲りないので、スリープフローを使つ。

当然ながらサイトはあつたと意識を失つた。
しかし…。

「髪つてなんだろな？」

「知るか」

サイトを地面におことつて、紅蓮さんの治療に取り掛かる。
でつかいたんじぶになつてた。…後で謝るつ。

さて、サイトと紅蓮さんをテントに置いて散策しよつ。

え、サイト危険？ 紅蓮さんを「沈黙」させたから問題ない！
簡単に言つと、俺達が戻るまで詠唱どころか魔法の発動さえ出来ない呪いをかけてやつた。置き手紙はおいたので大丈夫だ。

まずはルイズ嬢探さないとな。

「シエスター、ちよつとこい？」

「あれ、イオさんじゃないですか。お久しぶりですね、今までビーハー？」

「ちよつとアルビオンへ。それよつて、サイトが落ち込んでるんだ
けど何があつた？」

尋ねると、シエスターはちよつと困つた感じで周囲を見回した。

「　　実は、先日王女殿下が学院を訪れまして」

「　　ゴルベール先生がめかし込んでた日か。

　　シエスタの話を聞く限り、別に王女殿下が話の焦点ではないらしい。

　　魔法衛士隊隊長、ワルド。ルイズの婚約者とか。

　　田ぐ金の髪が眩しい美丈夫だそうだ。髪つてそれか。

「つまりサイトは失恋か？」

「多分…」

　　シエスタ複雑そうだなあ。

　　何せこの黒髪の少女はサイトに惚れているのだ。

　　当の本人はルイズ嬢に自覚なしの恋してるっぽいし…やれやれ。

「人間は面倒だな」

「半分エルフとしては同意するけど、そういうてやんな。人間ってのは面倒くさい生き物なんだよ」

　　俺みたいな半端者が何を言つかって話だけど、人間はそんなもんだ。

「大体判つた。じゃあルイズ嬢知らない？」

「ミス・ヴァリエールなら多分応接室です。ミスター・ワルドとお話しがあるようでしたから」

へ？

つまり、ワルドさんまだいるの？

「何でも、婚約について話があるって暇を貰つたらしげですけど」

あの人嫌いです、とシェスターは小さく呟いた。

シェスターが嫌うつてことはよつぱんどなんだろつな…一応警戒しどくか。

「仕事中に悪かつたな」

「いえいえ、私も少しすつきりしました」

じゃ、とシェスターと別れる。
しかし弱つたなあ。ルイズ嬢とはまだ話せないだろつし、サイトどうしようつ？

「つづく人間は謎だな。欲しい物があれば力尽くで奪い取ればいいものを」

「力尽くで手に入れられないものだつてあるんだよ」

そう言つと竜帝は度し難い、と眉を顰めた。

「いつか理解出来るんじやないか？ 今のお前なら」

クオン大陸の大邪竜ではなくただの竜帝なら。

ただの竜帝つてなんかおかしいな。今度真名あるか聞いてみよつ。

「理解でやる由など来なくて困ります」

「素直じゃないな！」

そう言って笑つたらぽかつと殴られた。
ホントに素直じゃない。

笑いをこらえながらテントへ戻ると、すゞく不機嫌な紅蓮さんと、
突つ伏してゐるサイトがいた。

…どういう状況？

取り合えず紅蓮さんの呪いを解いて話を聞く。

「何があった？」

「…ピンク髪の少女が来て、自分が結婚する事を伝えられたり、き
なり崩れ落ちただけです」

…とどめ刺されたか。

つて結婚！？

戦争終了と結婚式…？（後書き）

まさかの結婚フラグが残っていた。

ここにルイズ達はアルビオンへ行つてません。何故ならアルビオンの勝利はほぼ確実で、わざわざ手紙を取りに行く方が危険なので。ですがサイトはワールドにぼこられたあとだつたり。

因みに、このあと紅蓮さんは上司達のテント暮らしが知り、呆然とします。

流石に男四人でテント暮らしが如何なものかと考えたイオが予備のテントを出したりもします。でも結局テント。テント暮らしなんてしたことないだろ？紅蓮さんは大丈夫だろ？

「ハムグコアンダの翻訳（前書き）

タイトルの通りです。

ラドグリアン湖の精靈

落ち着け俺。『「う』時は素数を数えるんだ…』って現実逃避してる場合じゃねえええ！

数日アルビオンにいってたら『主人様が結婚。』『う』展開だホントに！

「…先生、大丈夫ですか？」

「無理」

サイトじやないけど凹みたいよ…。

あれだ、妹が嫁に行く気分？ 笑えねえ。

シャルが嫁行くときもこんな感じなのかもな…。……。

認めるかああああーー！

「…竜帝様、また洗脳か何かを？」

「…ひとりんぞ紅蓮の魔導師。あれは素だ」

外野が何か言つてるけどスルー！

未だ嘗てなく腸が煮えくり返る…！ ヒースが相手だひとつ認めないからなシャルー！

…って落ち着け。今の問題はシャルじやなくてルイズ嬢だ。

まずは問題の把握だ。話はそれからだ。

「というわけで教えて『テルフ!』

「おう? 帰つてたのかエルフの兄ちゃん」

凹みまくってるサイトから『テルフリンガー』を拝借。本人まだ凹んでるしきいよな。

「ああ、あの娘っ子の事かあ。意地だよ意地」

「意地い?」

「ん。婚約者にプロポーズされて、相棒が嫉妬してたのにも関わらず突っぱねちゃってなあ。

あの気の強さだろ? 謝れずにまた突っぱねてプロポーズを受けちまつたんだ」

「…成る程」

結婚つて人生の一大事だろ、そつ簡単に決めちゃっていいんかねえ? しかし呆れた。

ルイズ嬢もだが、そこなへタレもビツじて想い合つてることに気づかないかな。

「ん、ありがと『テルフ』。あとで磨いてやるよ」

「ありがてえ。相棒は手入れド下手ビツじるが、やつてくれすらしね

えからな

「デルフを一寧に鞆へ戻して背負つ。サイト丸まつてゐるし。
さて、当面の問題はサイトか。

だつて人様の結婚式なんてそつ簡単にぶち壊せるもんじやないし。
いや、普通は壊さないもんだけど。

「何だ、壊さんのか」

「だから心読むなよ、つか残念そつとしてるんじやない」

「…あの、話が見えないんですけど」

あー、紅蓮さんは知らないもんな。
竜帝説明よろしく。俺はサイトにお説教していくから。
面倒な訳じやないぞ！

「む、待てイオ！」

「待たない！」

サイトの襟首掴んで適当にテレポート…

一瞬で景色が森から湖へ切り替わる…つておい！？
「適当にしそぎたー…」

やつちまつたあああ…

浮遊術を使う前に湖に「じまん」と落ちる俺たち。

「な、なんだあ！？」

サイトも正氣に戻ったみたいだけじゃねえじゃねー！

俺泳げないんだよ！

情けないとか言つな！

ウーンデルは内陸、ミラー・ジュパレスは論外、ビートで練習しようと！

つか…やばい、デルフ背負つてゐせいかもしれんが、だんだん沈んでく…。

「イオ、しつかつしるー。」

サイトの声が遠い。

苦しい…！

もつだめか…短い蘇りの日々だったな…。

『イオはんー。』

ぐいっと身体が引っ張られた。

不思議なことに先ほどまでの苦しさがない。

『じつかりしてえなー。』

『イオー。』

「…サイト？ それに、もう一人…」

『「うちゅうじゅ…』』

ぱしゃん、と水が弾け、チカラが集まる。

チカラは青い泡をなし、小さな人魚の姿を作った。

「ウンディーネ…？」

「正解や！ 今はうちのチカラで一人を押しとるさかいな、陸まで
もつ少しやで…」

何で、どうして。

あまりに唐突な展開についていけない。

水の流れに乗せられて、無事に陸にたどり着くと、ウンディーネは
人好きのする笑顔で笑った。

「助かつてよかつたわ～」

「ありがとう、助かつたぜ。…でもお前何なんだ？」

「うちゅは水の精霊や！」

そう言ってウンディーネはふふん、と小さな胸を張った。

…あー、悪かった、悪かったからその二叉の槍引っ込めてください。

「でも何でウンディーネがここにいるんだ？ …まさか八精霊全員
いるんじや」

「…ひにも判らん。気がついたらここいたんよ。他のみんなの居場所もわからへんし…」

「…あー、知り合い?」

「「「うん」」

サイトの間に迷うことなく頷く。

「けど、なんでワグリアン湖のど真ん中に落ちてきたん?」

「あはは、適切にトレポートしたら失敗しちゃって…」

いやあ懐かしいこの感じ。つかここワグリアン湖つてこのつかって和んでる場合じゃない! ルイズ嬢の結婚問題、どうしよう…。

表情に出てしまつたのだろう。ウンディーネが心配そつこのぞき込んできた。

「お困りかいな?」

「…まあ、困り事つちやあ困り事なんだけど」

そうだ、ウンディーネに相談してみよ。

かくかくしかじかでこうこうことなんだけど…。

「…取り合えずそつちのあんさんがヘタレなのは理解したわ

「ぐふおー?」

ウンディーネの鋭い突つ込み！

サイトの急所にあたつた！ 効果は抜群だ！

…む、また電波が。

とにかく硝子のハートを再び粉碎されたサイトはうずくまつた。

「大体な、決闘に負けついでじけるつちゅうのがすでにあかん！

男だつたらもつとしゃつきりせんかい！ そこは済つてでも引き止めるところやろお！

女の子はな、纖細なんや！」

サラマンダーと一緒に戦争！」ついた彼女は纖細といえるのだろうか。

「イオはんす」ぐ失礼なこと考えてへん？」

「考えてへん考えてへん」

あ、移つちやつた。

ともかく、ウンディーネの説教はまだまだ続いた。

…つか、途中からサラマンダーとの惚氣な件について。幸せそりだからいいけど。

サイトなんか魂抜けかけてるし。

まあ、慣れてなきや辛いよな。

説教は一時間に及び、サイトはすっかり屍と化していた。

「結論！ 好きな人へは？」

「本気で体当たつすること……です……」

「はいよろしい！」

説教は終了したようだ。

あんまり暇だつたからテルフの手入れしてたよ。

「水に落としておいてよくなつぜ」

「不可抗力だから許して？」

「いや、許さねー。きちんと鎧びとつまでしてもらわこやな？」

「いこいこい！ 鎧びとつは大変なんだぞ！」

頭に来たので湿気た鞘に押し込んでやる。流石に田向にはおことくが。

「へくしつ！」

寒っ！ 倉庫に入れてた服に着替えたはいけど、頭が濡れっぱなしは寒すぎる。

サイトも同様みたいだ。ちよつぴりつとつてんだしきに寒そうだ。

「まあ、何はともあれありがとうなウンティーネ。これでやることは決まった」

「ええよ、つちも世みたいに話せて嬉しかったし。また遊びに来てや！」

うん、今度は紅蓮さんと一緒に来るよ。
あいつも何だかんだいってウン「トイ」ネには感謝していると思ひし。

…あれ、何か大事なことを忘れてるよ？

そんな疑問を抱きつつ、戻るためにテレビポートを発動した。

ラドグリアン湖の精霊（後書き）

ウンディーネ登場。 またすぐにでる予定。

浮遊術：

聖剣HOMの幻夢の主教が使つてるあれ。
どうでもいいんですけど、カリスマで飛行ユニットの上範囲攻撃持ち
つて一體…。

ロジー（弟兼主人公）は聖剣装備でも跳躍ユニットなのに。

本家の水の精霊様は基本は不干渉の模様なので出てきません。
ただ、ウンディーネが呼べば出てくるかも？

素人いん火竜山脈（前書き）

というわけで特訓編。
何でかというと本編参照。

といつわけで戻ってきたよ！
しかしあいつ少し遅く戻ればよかつた…とても眩しい笑顔があるんですが。

「よく帰つたなイオ。少し話さんか？ 殺し合いで」

訳…よくも面倒事を押しつけてくれたな。
あーあー、死ぬかも？

だが対策は練つていてる！

「竜帝、それより楽しいことしようぜ」

「ほつ？ 貴様をいたぶる意外に何があるのか？」

耳貸せ耳。

かくかくしかじかでいつこいつことだけど…。

俺の提案を聞いて、竜帝は楽しそうに口元をつり上げた。

「成る程、貴様にしては面白い考え方だ」

「だらう？ ほら、紅蓮さんもおいでおいで

「…すつじく悪い笑みですよ先生」

紅蓮さんも人のこと言えない笑顔じゃないか。察しがよくて先生嬉

しきぜ。

サイトが訃判らんつて顔してるけど、そんな顔できるの今の「ひ
だからな？」

覚悟しろよ？

（悪寒がつ！？）

む、殺氣でも漏れたか？
いや、勘がいいのか。サイトがガタガタ震えてる。

「なあサイト」

「つ、何だよイオ？」

「お前ルイズ嬢に結婚して欲しくないんだよなあ？」

にんまり神父スマイルで笑うと、サイトは面白ごべりご慌てだした。

「違つ！？…………うー……あー……違わ、ない」

素直でよろしい。

ウンディーネに会えて本当によかつた。

「それに、ワルドに勝ちたい？」

「勝ちたい！」

今度はすごい勢いで頷いた。

そんなに悔しかつたのか。まあ都合がいいんだが。

「じゃあ特訓しようつか

「…え？」

*

暖かな地熱、広大な密林に、どっしどとした存在感を出す山々。

火竜山脈へやつて参りました！

うん、辺りから色々とヤバそうな気配がするな！

「ちょっと待て！？ IJIRANGでいえば上級者がくるような所だ
ろ霧雨気てき！」

「心配するな、別に戦えって訳じゃない。

生き残れ！」

「変わんねえ！」

変わるぞ？

今のサイトには基礎能力が足りていない。魔法衛士隊の隊長といつ
ワルドには全く歯が立たないだろ？。

そこで、一歩間違えば危険しかないこの火竜山脈でサバイバル！
生きて帰れれば危険察知能力と身体能力が上がるぞ！

つまりせつときの提案は、サイトに手つ取り早く度胸をつけさせようつてことなのだ。

「… そういうやこって外国だよな？ 不法侵入：つて今更か。
まあ、テレポートで真っ直ぐきたから不法侵入で捕まることはない
だろ？ ここどう見ても人外魔境だし。

あ、今回はちゃんとルイズ嬢に言つてきたよ、一週間ほどサイト借りるつて。

その後爆破されかけたけど。

…想い合つてゐよなああの反応は。

気合いを入れねば申し訳がない。一応代わり置いといたけど。

横つちよで竜帝が懐かしそうに田たを細めた。

「ドラゴンズホールを思い出すな

「そうですね…あ、ドラゴン飛んでますよ

「帰らせてくれ！？」

「バカたれ、帰つたら来た意味がないだろ。
えー、では今日から一週間、サイトいぢ…サイト強化週間にした

いとります」

うつかり本音が。

サイトが思いつきり責ざめたけどまあスルー。

「サイトこま！」と、一日素振り千回、食料調達などをしつつ、で
きればドリゴンからも逃げきれる体力をつけて貰いたい

「無茶言つなよ！ そんな短時間で体力が付く訳ないだろ？ わつ
と筋肉痛だつて酷いぞ」

「無理じゃないんだな。

ヒールライトで、筋肉痛にも効いたりするんだよね。限度はあ
るが。

それを教えるとサイトは小さく悲鳴を上げた。

「あ、命の保証はあるからな？ とにかく荒っぽくても基礎をつけ
ないといけないからな」

サイトがこれからやることには体力と度胸が必要だからな。
技術を教えるのはその後。教えるのは俺ではないけど。
因みに俺は救護係。

紅蓮さんと竜帝にはサイトの命の保証はして貰つて、あとは好き勝
手にしていいといつてある。

流石にHインシャントと神獣の技は自重して貰うけどな！
あと、狩りすぎるなよと注意した。訓練所にさせて貰つわけだ
し、できるだけ命は奪わないようにしなこと。

救護係も楽じやない。

まだ震えているサイトを安心させようと、ぽんと肩を叩いた。

「大丈夫。ラスボスと中ボスが守つてるんだから死ぬわけがないよ」

「…ラスボス？」

「知りたそ娘娘だな？…訓練が終わつたら、ちょっと話すよ」

「…いや、サイト達にはあんまり過去のことを話してなかつたな。俺が覚えてないのもあるが。」

「…どうか考へていて、サイトの震えが止まつた。いや、堪えている？」

「…そのまますぐな瞳でサイトは俺を見た。」

「…死なんいんだよな？」

「俺の矜持にかけても絶対死なさないよ。死ぬほど怖い想いをするだけだ。」

「…話を聞く限りお前の状況は絶望的に悪いし、ルイズ嬢を諦められるなら戻るよ？」

「やる」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「へっ！ 1日五千だって振つてやるぜー！」

上等！

さあて、サバイバル生活の始まりだ！

素人いの火竜山脈（後書き）

恐らくサイトを初心者の状態で火竜山脈に放り込んだのはイオぐらいでしょ。

まあ、パーティメンバーが中ボス×2とラスボスだし、これくらいやってもいいかなと！

：反省します。けど後悔は（ゝゝ

しかしテレポート万能説。

まあ地図を完全に把握している紅蓮さんがいなければ、前話のイオみたいな事になりかねるんですが。

テレポート（改）：

地理を把握してれば魔力の限りどこへもいける。

適当にしすぎると『いしのなかにいる』状態になるので注意が必要。

因みにサイトの代わりに、『コピーを作る魔法の応用をして』二サイズな分身を置いときました。

コロボックルサイズですが危険が迫ると教えてくれるよつて設定してあります。

コピー魔法はベルガーさん直伝。

おまけ

「…くすん、サイトのバカ、イオのおせつかい」

『なくないよるいづう』

「くすん。あんた、イオの作ったサイトの分身の割に馴れ馴れしいわね……」

『だつてるこゝの」とすきだからな～』

「なななにこつてんのよ分身のくせにー。」

『おつじなるもかーこつといがかわいことぬもつむがー』

「……分身サイト、いじり来なせこ。とと特別にベッドで寝かせて上げるわ」

『それもかーーー。』

成長記録（前書き）

まとめ的なもの。
決して修行風景が思いつかなかつたとかそういうのぢや（れ）

一日目：

素振りをしたサイトが颯爽とへたばつていたので軽く回復してやつた。

素振り程度で疲れてるんじゃない、と言つたので紅蓮さんと食料を探しに行って貰つた。

すると直後に凄まじい火柱があがつた。

早くも後悔して現場の生き物達を治療した。原因はファイアボールかな？

新たに火気厳禁と付け加えると、紅蓮さんはめりやくちや不機嫌になつた。お前は放火魔か。

そう言つてやつたら、

「炎が使えずして何が紅蓮の魔導師ですか」

と言われた。

…つい納得してしまつた俺が恨めしい。

因みに、治療した生き物達は襲いかかってきたけど丁寧にお帰り頂いた。

一番でかかつたドラゴンを、メルティナモールでちょっと齧かした
ら逃げられた。

サイトに本当に神官なのか疑われたけど…。

腹が立つたので実戦訓練をしてやつた。
つい熱が入りすぎてボツ「ボコにしたけど、まん丸ドロップあげた
から問題ないだろ?」

内容?

簡単な組み手だよ。ちょっと投げすぎたけど。

ちなみにその田は持つていた保存食でしのいだ。
倉庫の中身は腐らないが貯蔵が気になる。どれぐらいはいつたつ
け…。

明日から食料は俺が調達しよう。

二田田:

早くもサイトが筋肉痛を訴えた。

軽く押さえる程度で回復してやつたが、予想外に早かつたな。

素振りをさせてから散歩へ行かせる。今度は竜帝が同伴だ。
渋つてたけど、ドラゴンが見えた瞬間にやつと笑っていた。サイト
ご愁傷様。

その間に俺は食料調達だ。メインは山菜。

幸い食えそなのは沢山生えていた。万一毒があつても、ティンク
ルレインで浄化できるから心配ないだろ?。

籠一杯に山菜を積むと、道中で火蜥蜴に遭遇した。けど教われはし
なかつた。

お腹空いてるのかとおもつて山菜を上げたら懷かれた。可愛い。キ
ュルケの気持ちが分かつた瞬間だつた。

火蜥蜴とは途中で分かれて昼食の準備をする。

倉庫に入ってる調理器具を総動員、…といつほどでもないが、鍋の準備だ。昼だけだ。

ちょうどいい具合にできた頃、散歩から帰ってきたサイトは魂が抜けたような顔をしていた。

ドラゴンが…と呻いてるところから察するに、巣にでも突っ込んだのだろうか。

鍋は上手かった。ちょっとピコッと来たけど、まさか？

その後純人間の二人が腹をこわした。

すぐにティンクルレインで解毒したが、気をつけよう。

昼食後、少々の休憩の後でサイトをジャングルに放り込んだ。勿論中空で様子見してるので死ぬことはないが、様々な生物から全速力で安全圏まで逃げるサイトを見て、ちょっと可哀想なことしたかな、と反省はした。

夕食は保存食使って美味しくしよう。

そういうや氣づいたんだけど、俺と竜帝は何故か襲われなくなつていた。

竜帝は本能で強大な存在だと見破られてるのだろうが、何で俺も？サイトと紅蓮さんは容赦なく襲われてるんだけど。

無事に戻ったサイトには、じ褒美としてドロップをあげた。流石に一発殴られた。

夕食は宣言通り保存食を使った。

干し肉と山菜のスープだが、スープは一人とも飲まなかつた。…これは安全なのに。

三日目：

恒例の素振り千本と回復から始まる。

しかし火竜山脈での生活が妙に楽しいのは何でだ？

日記を付けてると、紅蓮さんがむすっとした顔のまま稽古を申し出た。

火の魔法が使えないことがそんなに不満かよと突っ込んだら、違つと言われた。

まあ稽古は嫌いじゃないし、サイトは竜帝に任せて散歩に行かせて紅蓮さんと稽古だ。

因みに稽古といつてもほぼ模擬戦。

ただ、カウンタマジック使つたら盛大に怒られた。

手加減したらして怒る癖に、我が儘め。

取り合えず紅蓮さんをこつてり絞つてサイト達の帰りを待つた。

そうしたら竜帝が何かの肉を持ち帰ってきた。

竜帝は上機嫌だったが…サイトはがたがた震えていた。何があつたんだ。

竜帝と同伴をせるのははじめておいつ。

因みに何かの肉は味付けしつかりして炙つたら大変美味だった。

残りは保存容器に入れて倉庫に放り込んだ。サイトが食べれるようになつたら焼き肉でもしよう。

今日の昼は紅蓮さんと一緒に訓練させた。具体的に言つと紅蓮さんが攻撃魔法（弱め）を使ってサイトがそれをよけるという内容。

被弾率が半端なかつた。紅蓮さんホーミングつけるとか鬼畜。

最初はホーミングすんなと注意したけど、聞かなかつたのでメルティナモールで沈めておいた。

年上の言つことはきこいつか！

紅蓮さんを沈めてしまつたので、代わりに筋トレさせた。腹筋背筋鍛えろよ。

そういうえばサイトに魔法教えるべきかな？

それ以前に使えるか判らんけど…帰つたらウンディーネに相談しう。

教えるにしてもある程度剣の腕を磨いてからだな。

成長記録（後書き）

セイントビーム：

光属性の攻撃魔法。ホーリーボールの上位。
全体攻撃にすると空から光の柱が降ってくる。普段は手から照射される細いビーム。

紅蓮さんが食らったのは柱の方。

こんな感じで修行風景をお送りしたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4663y/>

食われた俺のゼロ魔戦記

2011年11月27日12時46分発行